



高松まつり・花火

讃 樹 会

令和8年9月1日発行

CONTENTS

- 02 同窓会長挨拶
- 03 同窓生教授就任挨拶
- 05 退任挨拶
- 10 新任教授就任挨拶
- 16 第19回讃樹会定期総会開催報告
- 18 第19回讃樹会定期総会議事録
- 20 会計報告（令和7年度決算・令和8年度予算）
- 21 令和8年度・9年度新理事一覧／組織図
- 22 ニュースの窓
- 26 理事会議事録
- 27 令和8年度研究助成金／研究奨励金 選考結果
- 28 特集／座談会 これからの香川大学
～人材確保の方策等～
- 35 FOCUS《柔道部》
- 36 支部会・懇親会
- 40 学生の短期留学報告
- 43 学生支援（競争的資金）活動報告
- 44 教室便り
- 53 編集後記／事務局からのお知らせ

発行 香川大学医学部医学科同窓会讃樹会
〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1
TEL/FAX 087-840-2291
E-mail sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp
<https://dousoukai.site/sanjukai/>

発行人 星川 広史
編集人 谷 丈二
印刷所 株式会社美巧社



同窓会長挨拶

同窓会長挨拶



星川 広史（平成2年卒・5期生）

この度讃樹會第19回定期総会におきまして、2期目の会長に信任いただきました5期生の星川広史と申します。母校に所属している身として全国の同窓の方々に少しでも現在の母校の状況をお伝えしたい、またその責務がある、ということが会長就任の最大の理由です。2023年から始まった医学部再開発は、この6月から第4期に突入します。本日6/17日に撮った写真（写真1）ですが、向かって右が改修が終わった研究棟南側部分、左がこれから工事が始まる北側部分で、研究室の実験機器や机は移動、もしくは廃棄されます（写真2）。最終の大学院棟改修が終了するのは2029年になる予定で、古い校舎をご覧になりたい先生方は早めにお越しください。新棟であるDRI先端医学研究棟



写真1 3期終了4期開始



写真2 研究室改修

の1階に同窓会館が移転しておりますので、お気軽にお越しいただけますと幸いです。

同じくDRI棟の3階に昨年厚労省の医師養成拠点事業として採択された、かがわ総合診療医センター（<https://kagawa-gmcenter.jp>）（写真3）が居を構えており、これから総合診療医を目指す学生から、セカンドキャリアとして総合診療的な働きをしたい医療人のリカレント教育まで、幅広い支援の出来るセンターとして、今後の香川の医療、四国の地域医療を支える拠点になります。

地域を支えるのは最後はひと、です。いくら立派な組織や施設があってもそこで同じ目的意識をもって働く人がいなければなにも成すことはできません。本年度から在校生に対する奨学金貸与制度（卒後に県内で勤務する義務あり）が開始となり、県外出身者を含む5名の在校生が手を挙げてくれました。2年後には新たな入試制度として大学独自枠（次世代枠）が設置され、香川大学で研修し、一定期間県内で働いていただくことになります。医師に限らず、地方では人材の確保を進めていくには自身の県で賄う以外に有効な方策がなく、いろいろ批判はありますが、香川の未来の医療を支えるにはまずはひと、集ってくれた人材を大切に育てることを医学部の最優先課題として取り組んでまいります。

同窓会の皆様方におかれましては、今後も母校の状況に関心を持っていただき、できる範囲で結構ですので引き続きご支援賜りますと幸いです。



写真3 総合診療医センター

同窓生教授就任挨拶

教授就任にあたって

「一隅を照らす」想いを、保健管理の現場へ



香川大学保健管理センター 教授

泉川 美晴（平成13年卒・16期生）

2026年4月1日付で鎌野寛先生の後任として、香川大学保健管理センター教授ならびに所長を拝命いたしました泉川美晴と申します。讃樹会会員の先生方におかれましては、平素より格別のご高配を賜り、心より御礼申し上げます。また、ご挨拶の機会を頂戴いたしましたことを大変光栄に存じます。

私は宮崎県に生まれ、関西で育ちました。四国の地を初めて踏んだのは香川医科大学の入試の際でしたが、試験会場から望んだ讃岐平野の風景に格別の感慨を抱いたことを、今も鮮明に記憶しております。その後、この地で学び、働き、気がつけば人生の三分の二近くを過ごしてまいりました。今ではこの地こそが私の心の故郷となっております。

学生時代はバスケットボール部の活動やアルバイト、実習と多忙な日々を過ごしました。国家試験直前にインフルエンザに罹患したことも忘れられない思い出です。試験を目前に控え悪夢のような出来事でしたが、友人が見舞いにメロンを届けてくれました。ただ、感染予防のため受け渡しは玄関先。友人の姿を見ることなくメロンだけが我が家に到着するという、どこかシュールな光景でした。高熱の中で味わったメロンの甘さと友人の気遣いは、今も懐かしく思い出されます。

卒業後の進路については大いに悩みましたが、6年次の臨床実習での経験を契機として、2001年に旧第一内科（現・血液・免疫・呼吸器内科）へ入局いたしました。当時はまだ総合診療の概念が広く浸透しておりませんでした。幅広い内科診療能力を涵養するという教室の理念に強く惹かれたことが決め手となりました。

その後、内科医として研鑽を重ねる中で出産を経験いたしました。当時は現在ほど育児と仕事の両立を支援する環境が整っておらず、試行錯誤の日々が続きましたが、既存の枠組みにとらわれず、「一隅を照らす」を信条として歩んでまいりました。外来や病棟診療に加え、超音波、内視鏡、人間ドックや健診業務など、多様な経験を積み重ねてまいりました。

さらに、医学部に設置された地域医療教育支援センターの立ち上げに参画し、地域医療実習プログラムの構築やスキルスラボの整備に携わりました。この時期に膠原病・リウマチを専門とすることを決意し、専門医資格の取得と研究活動に取り組みました。希少遺伝性疾患における細胞内動態やサイトカイン分泌に関する研究を行い、その成果を国際学会で発表するという貴重な経験も得ることができました。

2018年からは、かねてより理想としていた地域医療の現場に身を置いていましたが、2024年、ご縁をいただき香川大学保健管理センター医学部分室講師として再び大学へ戻ることとなりました。保健管理センターは、学生および教職員の健康を支える重要な役割を担っています。学校保健、産業保健、メンタルヘルス支援など新たな領域にも携わることとなりましたが、これまで積み重ねてきた経験を生かすことのできる場であるとも感じております。

このたび、全学部の学生と教職員の健康を守る責務を担うこととなり、深い感慨を覚えています。国試を前にインフルエンザに罹患した当時の私は、不安を抱えながら周囲に支えられる一学生にすぎませんでした。それから四半世紀を経た今、保健管理センターにおいて体調不良や心の悩みを抱える学生の相談に応じる立場となりました。現在は、実習や国試を控えた学生へのインフルエンザワクチン接種なども行っております。学生時代にいただいた支えへの感謝を忘れず、今度は私が学生たちの「健康」と「成長」を支える力になりたいと考えております。

学生一人ひとりが健やかに学び、充実した学生生活を送ることができるよう、心身の健康を支えることを使命として力を尽くしてまいります。それが、これまで多くの方々に育てていただいた母校への恩返しとなることを願っております。

末筆ながら、讃樹会会員の先生方におかれましては、今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成13年3月	香川医科大学医学部医学科卒業
平成13年5月	香川医科大学医学部附属病院 医員（研修医）
平成14年6月	香川県立中央病院 内科
平成17年5月	三豊市立西香川病院
平成19年6月	土庄町立土庄中央病院 内科
平成20年4月	キナシ大林病院 内科
平成22年5月	香川大学医学部附属病院医員
平成23年10月	地域医療教育支援センター特命助教
平成26年4月	香川大学医学部附属病院 膠原病・リウマチ内科病院助教
平成28年4月	膠原病・リウマチ内科助教
平成30年4月	清仁会玉藻クリニック院長
	兼 香川大学医学部 血液・免疫・呼吸器内科協力医
令和6年2月	香川大学保健管理センター医学部分室講師
令和8年4月	香川大学保健管理センター教授
現在に至る	

教授就任にあたって



自治医科大学附属病院
総合周産期母子医療センター
新生児集中治療部

教授 中村 信嗣
(平成16年卒・19期生)

香川大学医学部医学科同窓会・讃樹會の先生方におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。このたび、令和8年5月1日付で自治医科大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター新生児集中治療部 教授を拝命いたしました。香川大学医学部を卒業し、小児科医としての第一歩を踏み出して以来、多くの先生方、先輩・同僚、そして後輩の皆様から温かいご指導とご支援を賜りました教授という重責を担うことができましたのも、香川大学での学びと、多くの方々との出会いのおかげです。

栃木県では自治医科大学と獨協医科大学の2施設が総合周産期母子医療センターとして連携し、県内のみならず茨城県西部を含む北関東地域の周産期医療を担っています。自治医科大学は、その中核施設として多くの重症新生児・小児患者を受け入れ、高度専門医療を提供しています。自治医科大学小児科学講座は、大学病院と同一敷地内に「とちぎ子ども医療センター」を併設し、約65名の小児科医師が診療・研究・教育に従事する、国内でも有数の規模を誇る小児科講座です。新生児部門をはじめ、神経、循環器、腎臓、内分泌・代謝、血液・腫瘍・免疫、アレルギー、消化器など、それぞれの専門分野が独立した診療・研究グループとして活動し、高度で専門性の高い小児医療を提供しています。また、とちぎ子ども医療センター68床、PICU 8床、NICU 15床、GCU 21床を有し、小児・周産期関連病床は100床を超える充実した診療体制を整えています。このような地域医療を支える診療基盤と研究・教育環境の中で、香川大学で培った経験を生かし、新生児医療のさらなる発展と次世代を担う小児科医・新生児科医の育成に取り組んでいます。

私は卒業後、香川大学医学部附属病院卒後臨床研修センターで初期研修を行い、香川大学小児科学講座に入局しました。入局当初から新生児医療を志望し、同時に大学院へ進学して研究を始めました。しかし当時は、「大学勤務なら博士号は取得しておこう」という程度の軽い気持ちであり、当時は研究者を志していたわけではなく、大学勤務には博士号が必要だろう、という程度の認識でした。

香川大学小児科学講座では、「地域医療を支え、グローバルに活躍する人材を育成する」という理念のもと、伊藤進名誉教授、日下隆教授をはじめ、多くの先生方からご指導をいただきました。大学病院での研修後には小豆島で3年間地域医療に従事し、外来・救急診療に加え、園医や学校医、離島医療ならではの課題にも向き合いました。この経験は、小児科医としての基礎だけでなく、地域医療の重要性を深く学ぶ貴重な時間となりました。

大学復帰後はNICUで新生児診療に携わる一方、大学院では新生児仮死の病態解明を目的とした新生仔豚

モデルの開発に取り組みました。試行錯誤の末に、「長期生存可能且つ一定の脳障害を有する新生仔豚モデル“Kagawa model”」を確立し、この研究を国際学会で発表した際、多くの海外研究者から高い評価をいただいたことが、研究に対する私の姿勢を大きく変える転機となりました。その後、オーストラリアへの留学を経て研究者としての視野を広げ、帰国後はKagawa modelを用いた水素ガス吸入療法による脳保護研究へと発展させることができました。現在は、この基礎研究を臨床応用へとつなげる最終段階に取り組んでいます。

少子化が進み、小児医療を取り巻く環境は大きく変化しています。出生数の減少は、小児科医が経験できる症例数の減少にもつながり、次世代を担う医師の育成という新たな課題にも直面しています。一方で、超早産児や重症新生児に対する高度医療の重要性はますます高まっており、大学病院には地域医療を支えながら、新たな医療を創出し、その成果を次世代へ継承していく役割が求められています。

私は、香川大学で地域医療の大切さを学び、新生児医療の奥深さに魅了され、研究の面白さを教えていただきました。これまで多くの先生方や仲間から受けたご指導を礎として、今後は自治医科大学において、診療・研究・教育を三本柱に、新生児医療の発展と地域医療に貢献できる小児科医・新生児科医の育成に力を尽くしてまいります。そして、香川大学とのつながりをこれからも大切にしながら、共同研究や人材交流を通じて、日本の小児・周産期医療の発展に貢献していきたいと考えています。

最後になりましたが、これまで温かくご指導、ご支援くださいました香川大学医学部医学科同窓会・讃樹會の先生方に心より感謝申し上げます。今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

略歴

- H16年3月 香川医科大学医学部医学科卒業
- H16年4月 香川大学医学部附属病院卒後臨床研修センター初期研修医
- H18年4月 香川大学医学部小児科入局
- H25年4月 香川大学医学部附属病院小児科 助教
- H26年4月 The Ritchie Centre, Monash University (Australia) 客員研究員
- H28年9月 復職
- R5年4月 香川大学医学部小児科 学内講師
- R6年4月 香川大学医学部小児科 講師
- R8年5月 自治医科大学総合周産期母子医療センター新生児集中治療部 教授

退任挨拶

教授退任挨拶

－ ご縁に支えられた三十年 －



香川大学保健管理センター
鎌野 寛（昭和61年卒・1期生）

このたび2026年3月、30年間勤務いたしました国立大学法人香川大学を定年退職いたしました。

振り返れば1996年4月香川大学に教員として赴任した当時、香川医科大学と香川大学はそれぞれ独自の歴史と伝統を受け継ぎながら歩んでいました。その後、2003年10月に二つの大学統合という大きな転機を迎え、異なる文化や価値観を持つ二つの大学が、一つの大学として新たな歩みを始めました。大学統合の過程では、制度や組織だけでなく、それぞれの大学が培ってきた文化や価値観、人々の思いを調和させていかなければならず、多くの試行錯誤があり、決して容易な道のりではありませんでした。しかし、その時間をともに過ごした先生方や職員の皆様との対話や協力があったからこそ、新しい香川大学の礎を築く一員として歩むことができたのだと思っています。

また、私自身は香川医科大学の卒業生でもあります。学生として青春の日々を過ごした香川医科大学と、教育者として歩んだ香川大学が一つとなったことに、不思議なご縁と深い感慨を覚えています。

私は香川大学保健管理センターにおいて、教職員の労働衛生、および学生の健康診断、健康相談などの学

校保健に携わってまいりました。その中で讃樹会会員の皆様や医学部の先生方には公私にわたり多大なるご支援をいただきました。特に香川大学における2007年の成人百日咳流行、2009年のインフルエンザA（H1N1）pdmのパンデミック、2020年のCOVID-19のパンデミックなど感染症法に基づく感染症の予防および調査など貴重な経験を重ねることができました。この際においても、讃樹会の先生方から多大なるご支援をいただきました。心より感謝申し上げます。

学生として学び、教員として歩み、その間には大学統合という大きな節目を経て、私のこれまでの歩みはこの大学とともにありました。院生時代より温かくご指導いただいた恩師田中輝和先生をはじめ、学内外の多くの先生方、讃樹会の皆様との出会いは、私のこれまでの歩みを支える大きな力となりました。この大学で多くの方々とのご縁に恵まれたことは、私にとって何ものにも代え難い財産です。これまで支えてくださったすべての皆様に心より感謝申し上げますとともに、讃樹会と母校のさらなる発展と、会員の皆様のますますのご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げます。



医学部教授退任挨拶

研究と教育に邁進した12年を振り返って

香川大学医学部自律機能生理学

平野 勝也



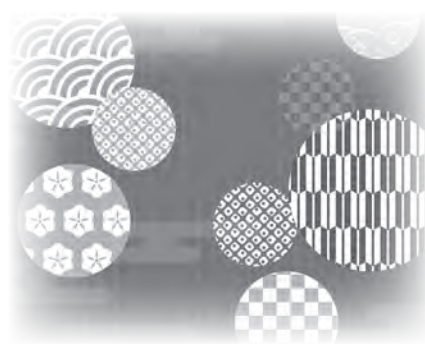
将来の医学を担う人材の育成に献身するとともに研究を新しい方向に発展させるという熱い思いを抱いて讃岐の丘に立ったのが12年前のことです。以来、研究、教育、管理運営において貴重な経験を積ませていただき、令和8月3月末で本学を定年退職いたしました。つつがなく職務を全うできましたのも関係の皆様のご指導とご支援の賜物であると、篤く感謝申し上げます。本学の発展に幾ばくかでも貢献することができたのであればこの上ない喜びに感じます。

学部教育においては、医学科2年次の生理学を中心に医学教育を担当しました。12年間で延べ1,424名の医学科生に生理学を教育しました。生理学の教育においては、卒後に医学医療を実践して行く中で病態を理解するための基盤となる人体生理学の基礎知識を定着させることを目指しました。定期試験中に問題を解答している学生の姿を見ては、果たして適切な教育評価を行っているのか、生理学知識の定着が図られているのかと自問自答、反省し、毎年少しずつ改良を加えて、生理学教育に当たりました。一方、広い視点に立った医学教育の目的は、科学的視点に立って医学を実践することができ、かつ、患者に寄り添う豊かな人間性を備えた医師および医学者を育成することにあります。基礎医学に身を置く立場から科学的素養の涵養に注力しました。科学的素養とは「事実」と「意見」を明確に区別し、事実を基に自らの意見を論理的に形成する能力と捉えています。「事実」を正しくとらえる観察眼の鍛錬と、「事実」を真摯に受け入れる倫理観の涵養、「意見」を論理的に形成するために必要な基礎的な医学知識の習得が肝要であると考えます。科学的素養の育成の場として「実習」を、医学知識の習得の場として「講義」を重視しました。卒業生にとって基礎医学の教員はやがて忘却の彼方に消えてゆく存在であると甘受していますが、学部時代に得た基礎的な生理学の知識と科学的素養を忘れずにいて、それぞれが目指す医師としての道や地域医療活動の礎となってくれば、教育にささげた努力が少しは実ったと感じることができそうです。

医学研究に対しては、臨床の課題を基礎研究で解き明かし、臨床へ還元する姿勢で取り組んできました。循環器内科で初期研修を行い、そのまま基礎研究に進んだため、血管系の生理学、病態生理学の領域から研究を始めました。生理学を標榜することになり、血管系にとどまらず広い視点に立って研究を発展させることを目指して本学に着任しましたが、血液凝固因子および蛋白質分解酵素が作用する細胞膜受容体に関する血管系の生理学、病態生理学研究は、加齢性インスリン抵抗性に関する代謝研究へと、さらには老化研究へと発展してきました。今では老化研究がメインテーマとなっています。研究は人が命です。本学において研究を発展できたのも優秀な教室員の協力のお陰であると感謝しています。

定年退職後は、ご縁をいただき福岡歯科大学にて引き続き基礎研究を継続する機会を得ました。新しい環境では歯周病の専門家と共同して、歯周病と老化のテーマで新しく研究を始めました。教育においては歯学部生の内科学教育の一部を担当し、また、総合病院において健診業務を担当しています。香川大学で育まれた研究、教育、管理運営の経験を、これからの活動に生かし、大学人として社会に貢献できるよう力を尽くしたいと意気込んでいます。

末筆ながら香川大学医学部および同窓会の益々のご発展を祈念いたします。長年にわたり不肖の身を受け入れ、育ていただいたことに改めて深謝申し上げます。



医学部教授退任挨拶

—香川大学での21年間をふりかえって—



香川大学研究基盤センター

かみとり しげひろ
神鳥 成弘

讃樹會の皆様におかれましては、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。このたび、2026年3月31日をもって、21年間勤めた香川大学を定年退職いたしました。在職中は、いろいろとお世話になり、誠にありがとうございました。心より御礼申し上げます。

2004年11月に香川大学総合情報基盤センター・教授に着任し、その後、研究推進機構・教授を経て、2013年4月より医学部・教授として勤務しておりました。しかしながら、勤務地は着任当初から医学部キャンパスで、教育・教授会等についてはおもに医学部で携わってまいりました。

私は理学部（化学専攻）出身です。前任校では工学部に勤務しており、医学部というところは初めての経験でした。医学部特有の講座単位で行動するということは、複数の教職員が協力して教育・研究に取り組み、何事も強力に推進できる大きなメリットがあります。その反面、個々の教員の自由度が制限されるのではないかと当初は心配しておりましたが、香川大学医学部ではそのバランスがうまくとられていると感じました。

医学部では、医学科と臨床心理学科の講義を担当していました。両学科とも真面目な学生が多く（特に近年）、教育に携わる者として大変恵まれていたと感じています。毎年、2月に医学科3年次生を対象に研究室に来てもらって一緒に実験する科目（医科学研究、課題実習）は、学生たちと長い時間をともにした楽しい思い出となっています。

私の研究室は、講座と言えるほどスタッフもいませんでしたが、少人数ながら研究活動を継続してきました。私の専門は、構造生物学という分野で、タンパク質等の生体高分子の立体構造と機能との関係を研究しています。香川大学が推進している希少糖研究についても、希少糖生産に使われる酵素の立体構造を決定して報告することができ、香川大学に赴任して本当に良かったと感じています。

大学運営に関しては、2007年4月から2025年9月までの長きにわたり、研究基盤センター（2022年3月までは総合生命科学研究センター）のセンター長を務め、大学内の研究支援活動に携わってまいりました。文部

科学省への概算要求の時期となりますと、毎年調書の作成に追われていました。医学部をはじめ、学内の教職員の皆様のご協力を得て、苦勞して作成した提案が予算化され、設備・施設が新たに導入されたときは、大きな達成感と喜びを感じました。

現在は、香川大学協力研究員として、医学部キャンパスに出入りさせていただき、これまでの研究成果を論文としてまとめております。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。

最後になりましたが、讃樹會のますますのご発展をお祈り申し上げます。

定年退職のご挨拶



香川県薬剤師会 副会長・薬事情報センター長
香川大学医学部薬剤学 小坂 信二

讃樹會の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

このたび、本年3月末日をもちまして定年を迎え、長年勤めた香川大学病院を退職することとなりました。病院薬剤師として、そして教育・研究に携わる教員として歩んできた年月を振り返りますと、多くの先生方、諸先輩方、同窓の皆様、そして職員の方々に支えられながら今日の日を迎えることができたことを、あらためて深く実感しております。この場をお借りして、ご指導、ご厚情を賜りました先生方、諸先輩方、同窓の皆様、そしてともに歩んでくださったすべての皆様に、心より御礼申し上げます。

医療を取り巻く環境は、この数十年で大きく変化しました。しかし、どれほど時代が移り変わろうとも、「患者さんに最善の医療を届ける」という医療人としての使命は変わることはありません。その思いを胸に、臨床業務、教育、研究という三つの柱を大切にしながら歩んでまいりました。

教授・薬剤部長を拝命したその矢先に新型コロナウイルス感染症が世界を覆い、大学も附属病院も、かつて経験したことのない危機に直面しました。感染対策、診療体制の維持、病院運営への対応など、目の前の課題に追われる日々となり、当初思い描いていた研究活動に十分な時間を割くことはできませんでした。それでも、地域医療を支える大学病院としての使命は決して揺らぐことはありませんでした。医師をはじめ、多職種の職員がそれぞれの専門性を持ち寄り、一つの目標に向かって力を尽くす姿を目の当たりにし、私自身もその一員として職責を果たすことに全力を注ぎました。

教育の面でも、感染拡大防止のため、講義の多くが遠隔形式となり、学生と対面で向き合いながら指導する機会が大きく制限されました。教育とは、知識や技術を伝えるだけでなく、学生一人ひとりの表情を見つめ、対話を重ね、悩みに耳を傾けながら人としての成長を支えるものであると私は考えています。そのかけがえのない時間を十分に持てなかったことは、教員として今なお心残りの一つです。しかし、そのような

環境の中でも真摯に学び続けた学生たちの姿は、私にとって大きな励みであり、未来への希望でもありました。

また、大学病院の運営にも深く携わる機会をいただきました。医療制度の変化や厳しい経営環境の中で、病院経営の改善に取り組んでまいりましたが、思い描いていた成果には及ばず、多くの課題を残したまま退職の日を迎えることとなりました。そのことには率直な悔いもあります。しかし、病院という組織は一人の力だけで動かすことのできるものではなく、多くの職員の知恵と努力、そして互いを信頼する心によって支えられていることを、あらためて学ぶ貴重な機会でもありました。今後は、次の世代の皆さんがその経験を生かして、さらに発展させてくださることを心から願っております。

退職は一つの節目ではありますが、これまでいただいたご縁を何よりも大切にしながら、今後も微力ではありますが、次代を担う世代の力となり、地域医療の発展に少しでも貢献してまいりたいと考えております。

結びに、今日までご指導、ご厚情を賜りました先生方、讃樹會の皆様、そしてともに歩んでくださったすべての皆様に、あらためて深く感謝申し上げます。皆様のますますのご健勝とご活躍、そして香川大学医学部のさらなる発展を心よりお祈り申し上げ、定年退職のご挨拶とさせていただきます。



医学部教授退任挨拶

—健康科学教室の5年間をふりかえって—



香川大学医学部 健康科学

塩田 敦子

令和8年3月、香川大学医学部医学科健康科学の四代目教授を、無事定年にて退任させていただきました。香川大学医学部にて教員として最後の日を迎えられることは、ひとえに大学関係者・讃樹会会員の先生方、健康科学教室・周産期学婦人科学教室のスタッフ、そして学生・大学院生の皆様のおかげです。温かいご支援とご指導を賜り、心より感謝申し上げます。

この5年を振り返りますと、教育の面では、看護学科での学部教育、大学院教育の一端を担う医学系の教室として講義を行い、看護研究や大学院での指導に携わり、博士前期課程学生2名を指導し修了に導くことができました。また医学科5年生の「漢方医学」を2年間受け持ち、医学部1年生3学科合同授業を性教育の観点からさせていただきました。研究では「プレコンセプションケアに活かす月経前症候群予防プログラム開発—低血糖に着目して—」が科研費基盤研究(C)に採択され、大学院生・学部生の協力を得て低血糖を示す若年女性の多さを示すことができました。また生活用品企業との共同研究では、日本人女性の月経量の実態についてまとめた論文が、JOGR (The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research) に掲載されました。臨床では附属病院女性外来診療部にて診療を続け、日本東洋医学会漢方指導医として専攻医を受け入れ、専門医を輩出しました。運営においては、2年間副医学部長(働き方改革・ダイバーシティ担当)を拝命し、附属病院での子育て医師活躍支援制度を開始、また子宮頸がん予防のためのHPV (Human Papilloma Virus) ワクチンキャッチアップ接種対象

世代の香川大学女子学生・女性教職員への医学部での集団接種事業を行い、のべ84名に受けていただきました。本学でもダイバーシティ推進室副室長を2年間務めさせていただき、県や地域の健康相談・講演なども続けてまいりました。

在任中最も心に残るイベントは、2025年7月に高松で開催した第53回日本女性心身医学会学術集会です。教室の加藤准教授が実行委員の長として準備から学生スタッフの手配、会計処理までがんばってくださいました。『ありのままをうけとめる—そして繋がる—』をテーマにしたこの会は、473名の参加をいただき、「楽しかった」と多くの方に言っていただけたことは大会長として本当にうれしいことでした。

卒後2年目から香川に来て36年、産婦人科医として育ててもらった香川大学は、私にとって母校そのものですが、ふりかえってその恩返しが少しはできたでしょうか。今後も周産期学婦人科学金西教授のお取り計らいで附属病院の診察協力医師としては残らせていただき、漢方指導医としての役目を果たすつもりです。まだまだ香川県内で婦人科医として女性の心身の健康をサポートさせていただきたいと思っております。

「集り散じてひとは変われど、仰ぐは同じき理想の光」という大好きな歌詞が、東京医科歯科大学入学前に1年通学した早稲田大学の校歌(作詞:相馬御風)にあります。また志賀直哉は『ナイルの水の一滴』という短いエッセイで以下のように著しています。

「人間というものが出来て、何千万年になるか知らないが、その間に数え切れない人間が生まれ、生き、死んでいった。私もその一人として生まれ、今生きているのだが、例えていえば、悠々流れるナイルの水の一滴のようなもので、その一滴は後にも先にもこの私だけで、何万年遡っても私はいず、何万年経っても再び生れては来ないのだ。しかもなおその私は依然として大河の水の一滴に過ぎない。それで差支えないのだ。」

最後になりましたが、今後の香川大学医学部・讃樹会のさらなる発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。



新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

—教育・研究・地域を繋ぐ「香川モデル」の構築を目指して—

香川大学医学部 健康科学講座 教授

み あけ じゅんいちろう
三明 淳一郎



令和8年4月1日付で、香川大学医学部 健康科学講座の教授を拝命いたしました、三明淳一郎と申します。讃樹會の先生方におかれましては、日頃より母校の発展と地域医療の充実に多大なるご尽力を賜っておりますこと、心より敬意と感謝を申し上げます。この伝統ある同窓会報の誌面をお借りして、新任のご挨拶と今後の抱負を述べさせていただきます。

【臨床の疑問から研究の道へ】

私は島根県で生まれ育ち、平成4年に鳥取大学を卒業いたしました。卒業後は母校の第一内科（循環器内科）に入局し、不整脈を中心とした臨床の最前線に身を置きました。日々の診療の中で、「なぜこの病態が生じるのか」「より根本的で身体への負担が少ない治療法はないのか」という問いが絶えず湧き上がり、その答えを科学的に探求したいという強い思いが私を基礎医学の世界へと導きました。

平成12年からは米国ジョンズ・ホプキンス大学、およびメリーランド大学へ留学し、遺伝子導入による生物学的ペースメーカーの開発研究に従事いたしました。最先端の研究機関で多様な背景を持つ研究者と切磋琢磨した経験は、「プロセスの誠実さこそが信頼を生む」という私の信念を形作る土台となりました。帰国後は、鳥取大学にて臨床と基礎を融合させた研究を推進し、近年では幹細胞を用いた心筋再生治療や、シングルセル解析を活用した細胞老化メカニズムの解明、健康寿命の延伸を見据えたセノセラピーの開発に取り組んでまいりました。

【医学教育への情熱—「共育」と「Why拡張モデル」—】

研究と並行して、私が情熱を注いできたのが医学教育です。平成30年からは准教授として、知識の伝達に留まらない教育を模索してきました。単なる暗記ではなく「なぜこの知識が必要なのか」を自ら問う力を養うため、ロールプレイ実習などのアクティブ・ラーニングを導入し、学生が自律的に学ぶ姿に教育の可能性を実感いたしました。

本学においては、教員と学生が共に学び合う「共育」の精神を大切にしたいと考えています。基礎・臨床・看護が垣根なく連携するチーム教育を推進し、知識を臨床や地域社会で具体的に「活用」する力を育む「Why拡張モデル」を提唱してまいります。このモデルは、医学教育の評価枠組みである「Millerのピラミッド」に、「自己省察（リフレクション）」と「社会的実践」を統合したものです。知識を得るだけでなく、その知識を現場で実践し、なぜそれが必要かを自ら振り返り、次の行動を導くというサイクルを循環させることで、学生が自律的に成長し続ける力を育みます。学生が患者さんの視点に立ち、自らの学びを可視化できるよう、長期的な視点での成長支援に尽力する所存です。

【香川での展望—地域に根ざした橋渡し研究—】

健康科学講座を主宰するにあたり、私は「教育・研究・地域をつなぐ」香川モデルの構築を目指します。

研究面では「公正・透明・持続性」を基盤に、若手研究者が安心して挑戦できる環境を整えます。これまでの再生医療や細胞老化に関する知見を、香川の地でさらに発展させ、地域社会へ還元する「橋渡し研究」を加速させます。

また、地域連携においては、産学官や地域医療機関との緊密な協働を通じて、地域特有の課題解決に貢献いたします。大学から「医療・看護の魅力」を積極的に発信し、次世代を担う若者たちが誇りを持ってこの道を志す未来を、皆様と共に築いていきたいと願っております。

【結びに代えて】

私の原点は常に臨床現場の疑問にあり、そのサイクルの中心には患者さんと地域社会があります。香川大学医学部の一員として、同窓の諸先生方と手を携え、香川県の医療・保健・福祉のさらなる発展に貢献できるよう、粉骨砕身努力してまいります。

讃樹會の先生方におかれましては、若輩者ではございますが、今後とも温かいご指導、ご鞭撻を賜りますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成4年3月 鳥取大学医学部医学科 卒業
平成4年4月 鳥取大学大学院医学研究科内科系専攻博士課程 入学
平成8年3月 鳥取大学大学院医学研究科内科系専攻博士課程 修了
平成8年4月 鳥取大学医学部附属病院 第一内科 医員
平成12年9月 米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部 循環器内科 Research Fellow
平成14年2月 米国メリーランド大学医学部 循環器内科 Research Fellow
平成15年10月 鳥取大学医学部統合内科医学教室 助手
平成17年6月 米国ジョンズ・ホプキンス大学医学部 循環器内科 Visiting Assistant Professor
平成18年4月 鳥取大学医学部病態情報内科学教室 助教
平成23年4月 鳥取大学医学部附属病院病態情報内科学 講師
平成30年4月 鳥取大学医学部薬理学・薬物療法学分野 准教授
令和8年4月 香川大学医学部健康科学講座 教授

教授就任にあたって

挑戦を恐れず、変化を生み出す薬剤部へ



香川大学医学部 薬剤学 教授

みの やすあき
見野 靖晃

この度は、同窓会会報に執筆の機会を頂き、誠にありがとうございます。薬剤部教授の見野靖晃でございます。この場をお借りして、自己紹介と今後の抱負を述べさせていただきます。

私は静岡県浜松市の出身で、静岡県立大学を卒業後、同大学院に進学し学位を取得いたしました。その後、浜松医科大学医学部附属病院薬剤部に入職し、調剤業務や病棟業務をはじめ、治験管理、医薬品情報、医薬品安全、試験研究室（TDM）室長など、幅広い業務を経験いたしました。浜松医科大学での薬剤主任、副薬剤部長、特任准教授を経て、本年5月より本学の第5代薬剤学教授・薬剤部長として奉職しております。学生時代を含め、県外での生活は今回が初めてとなります。どうぞよろしくお願い申し上げます。

研究面では、薬剤部における臨床研究として、患者を対象とした薬物血中濃度測定、薬物動態解析、臨床薬理研究を中心に取り組んでまいりました。学位取得までは免疫抑制薬のミコフェノール酸を主たる研究対象としておりましたが、その後はチームによる研究を意識し、免疫抑制薬以外の薬剤や解析手法へと対象を広げています。HPLCによる薬物濃度測定、薬効指標評価、遺伝子解析などの技術に加え、LC-MS/MS法の導入やトルバプタン光学異性体の薬物動態解析など、新規手法の運用にも積極的に取り組んでまいりました。これまでの経験を基に、薬剤学講座主体での学位研究も展開していきたいと考えております。

薬剤部長として、病院薬剤部に求められる役割の大きさを日々実感しております。病院薬剤師は調剤・医薬品管理、病棟薬剤業務、医薬品安全など幅広く業務展開してきましたが、これまでは診療報酬上の評価が必ずしも十分ではありませんでした。令和8年度改定における病棟薬剤業務実施加算1の大幅な加点評価や薬剤業務向上加算により、薬剤師の貢献がより明確に評価されるようになりました。また、地域支援・医薬品供給対応体制加算の新設により、地域との連携も一層重要となっています。これまでも大学病院薬剤部は県病院薬剤師会と連携して地域と関わってきましたが、診療報酬の面からもその役割が評価されるようになってきております。薬剤部一丸となって、病院経営や地域貢献にも尽力してまいります。

近年、薬剤師偏在指標に基づき病院薬剤師の確保が注目されております。香川県には徳島文理大学香川薬

学部があり、隣県にも薬学部がございますが、今後も病院薬剤師不足は続くことが予想されています。歴代の病院幹部の方々や薬剤部長のご尽力により、現在、薬剤部には48名の薬剤師が在籍しています。私は部の運営を任されている立場として、組織の構造に注目し、長期的に強い薬剤部を築くことを目標としております。そのためには、組織管理の基本である業務の枠組みや仕組みに関わる文書整備が不可欠です。加えて、部署ローテーションにより複数部署での経験を積み、多様な価値観を身につけることも重要です。かつての病院薬剤部は人数が少なく入れ替わりも少なかったため、専門性が個人に依存しやすい傾向もあったかと思えます。現在の病院薬剤部は多数の職員が働く組織であり、ルールの整備や他者への理解、そして長期的な組織維持の視点を大事にしていきたいと考えています。

私の生まれ育った浜松市は「やらまいか精神」に代表される挑戦を重んじる土地柄です。この精神は、先進性を求める大学病院とも親和性が高いと感じています。これまでの当薬剤部の取り組みを継承しつつ、新たな変化を生み出していければと考えております。讃樹会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

略歴

- 平成17年 3月 静岡県立大学薬学部薬学科 卒業
- 平成17年 4月 静岡県立大学大学院薬学研究科
博士前期課程 入学
- 平成17年11月 浜松医科大学大学院医学系研究科
医学専攻特別研究学生
- 平成19年 3月 静岡県立大学大学院薬学研究科
博士前期課程 修了
- 平成19年 4月 静岡県立大学大学院薬学研究科
博士後期課程 入学
- 平成22年 3月 静岡県立大学大学院薬学研究科
博士後期課程 修了（博士（医療薬学））
- 平成22年 4月 浜松医科大学医学部附属病院薬剤部 薬剤師
- 平成26年 4月 浜松医科大学医学部附属病院薬剤部 薬剤主任
- 平成30年 4月 浜松医科大学医学部附属病院医療安全管理室
ジェネラルリスクマネージャー
- 令和3年 8月 浜松医科大学医学部附属病院薬剤部 副薬剤部長
- 令和3年10月 浜松医科大学医学部附属病院薬剤部
特任准教授・副薬剤部長
- 令和8年 5月 香川大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

教授就任にあたって

～臨床と病理の融和から、香川発の神経科学を拓く～

香川大学医学部 病理病態・生体防御医学講座
神経病態病理学（旧 炎症病理学）教授

ちば よういち
千葉 陽一



この度、令和8年7月1日付をもちまして、病理病態・生体防御医学講座 神経病態病理学（旧 炎症病理学）の教授を拝命いたしました。この誌面をお借りして、讃樹會の皆様にご指導とご支援への感謝を申し上げますとともに、着任のご挨拶を申し上げます。

私どもの教室は、香川医科大学第2病理学教室（初代教授 宇多弘次先生）として発足し、2代目 阪本晴彦先生の時期に「炎症病理学」に講座名を改め、2013年より前任の上野正樹先生に引き継がれました。上野教授の時代から、当教室は神経疾患の研究および剖検診断を主要な柱として、教育・研究活動を展開してまいりました。このたび、私の着任に合わせ、教室の専門性をより明確に示すため、講座名を「神経病態病理学」へと変更いたしました。「神経系」を前面に打ち出すものの、これまで担ってきた学生教育や病理診断業務に関しては、従来通り神経系に限ることなく幅広くその役割を果たしてまいります。

私は岩手県盛岡市に生まれ、高校まで同地で過ごしました。大学在学中より、動物モデルを用いた老化に関する基礎研究に従事する機会を得ました。この時、間近に接した基礎研究者の熱気と迫力に圧倒され、研究の道を志すようになりました。卒業後は、恩師の「一度きちんと臨床の現場を見てきなさい」との助言もあり、脳神経内科医として大学病院や市中病院で4年間臨床に従事し、専門医を取得いたしました。その後、大学院にて初代培養細胞を用いた細胞老化の研究で学位を取得し、愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所の主任研究員として赴任いたしました。同所では、神経系を中心とした基礎研究を行うとともに、隣接する病院での病理診断や病理解剖にも携わるようになりました。

香川大学には、前任の上野教授の着任に際してお声がけをいただき、2013年9月に講師として赴任いたしました。本学へ赴任後は、病理医としての研鑽を重ねて病理専門医を取得いたしました。一方で、現在も脳神経内科医として学外の病院で外来診療を担当しており、病理と臨床の両面から神経疾患の診療に当たっております。

このように、私は脳神経内科医としてキャリアをスタートし、基礎研究から病理診断へと領域を広げながら、一貫して神経系を中心とした診療と研究に従事してまいりました。

現在、香川県においては病理専門医・脳神経内科専門医ともに、まだ十分とは言えない状況です。がん治療の進歩に伴い、病理医が治療方針決定において果たす役割は増大していますが、専門医は不足しています。また、本県における高齢化の進行も著しく、高齢化に伴う認知症やパーキンソン病をはじめとする神経変性疾患の増加への対応として、脳神経内科専門医の育成も急務です。

臨床と病理の両者に関わる専門性を持った教室として、今後の大学教育においては、学生や若手医師に両領域の魅力を伝え、将来の進路として選んでもらえるよう精一杯の努力を傾注してまいります。さらに、学内の神経系に関わる講座との共同研究を通して、香川大学における神経科学研究を推進する中心的な役割を果たしていきたいと考えております。

最近では大学病院にとどまらず、広く香川県内や近隣県の医療機関から剖検脳の検索をご依頼いただく機会が増えてまいりました。今後は四国における神経病理の拠点の一つとして活動を展開し、香川大学発の神経疾患研究を日本、そして世界に向けて発信する教室を目指して邁進してまいります。

讃樹會の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご支援とご厚情を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

略歴

平成7年3月	京都大学医学部医学科 卒業
平成7年5月	京都大学医学部附属病院 研修医（神経内科）
平成8年6月	市立長浜病院 研修医・医員（神経内科）
平成11年4月	京都大学大学院医学研究科 脳統御医科学系専攻（臨床神経学）入学
平成15年3月	同上 単位取得退学
平成15年4月	愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所 病理学部 主任研究員
平成17年9月	博士（医学）
平成25年9月	香川大学自然生命科学系 講師 （医学部 病理病態・生体防御医学講座 炎症病理学）
令和3年2月	同上 准教授
令和8年7月	同上 教授 （医学部 病理病態・生体防御医学講座 神経病態病理学）

第19回讃樹會定期総会開催報告

開催日時：令和8年5月23日（土）

会 場：講義棟講義室101

形 式：会場とLIVE配信によるハイブリッド開催

15：00～15：40 総会

16：00～17：30 記念講演会

講演1 16：00～16：40 講師 小原英幹先生 / 座長 正木 勉先生

演題：「消化器・神経内科学講座の組織構築と研究展開」

講演2 16：50～17：30 講師 杉元幹史先生 / 座長 三宅 実先生

演題：「香川医科大学第三期生、そして医学部附属病院長として

今思うこと、後輩たちに伝えたいこと」

18：30～ 懇親会（龍馬 高松瓦町店）

第19回讃樹會定期総会は、令和8年5月23日（土）15時から、医学部講義棟講義室101で開催されました。

今回はLIVE配信によって、会場参加できない場合でもインターネットを通じて総会、記念講演会を自由に閲覧できるハイブリッド開催を実施しました。

総会は前年度同窓会長星川広史先生（平成2年卒・5期生）によって開会宣言が行われ、引き続き議長を務め議事が進行しました。令和8年度・9年度会長選挙につきましては、多数の信任投票を得て星川広史会長の再任が決定しました。理事選挙につきましては、多数の信任投票により、各卒年1～2名ずつ計74名が令和8年度・9年度の2年間の理事に決まりました。

星川広史会長による所信表明の後、報告事項として、同窓生教授就任の報告、令和6年度・7年度の事業報告、令和7年度決算並びに監査報告が行われ承認されました。

次に審議事項に移り、令和8年度予算案が審議され決定しました。また、名誉会員が推薦され承認されました。

以上により、全ての議事の審議・承認が無事に終わりました。報告及び議事の詳しい内容につきましては、後述の総会議事録を参照ください。

休憩後引き続き16時から同教室において、記念講演



講師の小原英幹先生



講師の杉元幹史先生

会が開催されました。まずは、香川大学医学部消化器・神経内科学教授 小原英幹先生が演題「消化器・神経内科学講座の組織構築と研究展開」（座長 正木勉先生）を、次に香川大学副学長、香川大学医学部附属病院長、香川大学医学部泌尿器科学教授 杉元幹史先生が、演題「香川医科大学第三期生、そして医学部附属病院長として今思うこと、後輩たちに伝えたいこと」（座長 三宅 実先生）をご講演いただきました。

最後に、在学生を代表して、荻田洋平さん（4年）と関日向子さん（4年）から花束贈呈がありました。

総会後の懇親会は、高松市内の「龍馬 高松瓦町店」にて参加者32名で和やかに開催されました。



星川広史会長



選挙管理委員会 花岡有為子先生



小原先生と安田真之事務局長



西岡幹夫先生（消化器・神経内科初代教授）



講演1 座長
三宅 実先生

講演2 座長
正木 勉先生



◀LIVE配信設定中の学生さん



受付担当の学生さん



懇親会は瓦町の龍馬で和やかに

第19回讃樹會定期総会議事録 令和8年5月23日(土)15:00~17:30

開催日時：令和8年5月23日(土)

会場：講義棟講義室101

15:00~15:40 総会

16:00~17:30 記念講演会

講演1：講師 小原英幹先生／座長 正木 勉先生
演題：「消化器・神経内科学講座の組織構築と研究展開」

講演2：講師 杉元幹史先生／座長 三宅 実先生
演題：「香川医科大学第三期生、そして医学部附属病院
院長として今思うこと、後輩たちに伝えたいこと」

18:30~ 懇親会(龍馬高松瓦町店)

1. 開会宣言(前年度会長 星川広史氏(平成2年卒))

参加者19名及び委任状652名の計671名の参加となり、正会員(4019名)の10分の1以上を満たし総会が成立する旨の宣言が行われた。

2. 議長選出

立候補がなく、満場一致で星川広史前会長が議長に選出された。

3. 選挙開票結果報告

総会直前に実施した公開開票について、選挙管理委員長代理の花岡有為子先生(平成9年卒)から報告された。

会長選挙は、星川広史氏(平成2年卒)への信任投票となり、4月30日までに届いた郵便投票666票のうち、信任661票、不信任1票、無効4票という結果により、星川広史氏が会長に再任された。

理事選挙は650票の投票のうち、信任649票、不信任1票、無効0票という結果となった。会員の有効投票数の過半数の信任票であることが確認され、令和8年度・9年度理事が決定した。

4. 会長所信表明 再任された星川広史会長による所信表明が行われた。

5. 令和6年度・7年度事業報告

安田真之事務局長(平成9年卒)から令和6・7年度における同窓生の教授就任祝賀報告、及び事業活動報告が行われ承認された。

【学術局】

●研究助成金事業

令和6年度(第20回)

研究助成金 藤田浩二(大学院平成27年修了)

研究奨励金 横田崇之(平成28年卒)

令和7年度(第21回)

研究助成金 宮井由美(平成17年卒)

研究奨励金 森本 絢(平成23年卒)

●国外留学助成金事業

令和6年度 大庭聖也(平成27年卒)

城下郊平(平成25年卒)

本城晴紀(平成23年卒)

令和7年度 中寫晃一郎(平成25年卒)

阿部陽平(平成24年卒)

●講演会事業

令和6年度 第14回市民公開講座 高松市11月

令和7年度 第15回市民公開講座 高松市11月

●学会助成金事業

令和6年度採択

▶第37回腎と脂質研究会(香川大学 薬理学)

令和7年度採択

▶第26回日本 死の臨床研究会(香川大学 緩和ケアセンター)

【教育研修支援局】

●研修医支援(卒後研修センター)

香川県臨床研修病院合同説明会、指導医養成講習会、ICLS講習会。レジナビフェア・マイナビ等各種事業への参加支援。附属病院研修医歓迎会、研修医室設置のコーヒーメーカーやウォーターサーバーへの補充等、本院研修医への支援。卒業アルバム購入。

●専門医研修支援(医師キャリア支援センター)

JMECC講習会、外科手技講習会、心臓・腹部ハンズオンセミナー他への支援

●地域医療教育支援センター支援

地域枠交流会、地域医療ワークショップ(学年別)、地域枠病院見学ツアー、特別講義他への支援

●学生援助

①大学間国際交流協定締結校への学生の短期留学に対する助成：R6年度15名、R7年度13名 2年間で計28名

②競争的資金事業

R6年度4件(香川大学学生ACLS勉強会、IFMSA、香川国際協力NGO U-dawn、個人での国際学会発表参加)

R7年度2件(PQJ2026運営委員会、女木島救護所学生プロジェクト)

●国際交流協力事業(国内向け国際交流事業への支援)

「R6年度・2024年冬季国際医学プログラム」及び「R7年度・2025年冬季国際医学プログラム」において、ブルネイ・ダルサラーム大学医学生と香川大学医学部生による交流会への費用支援

【広報局】

●会報発刊 2年間で計4号(68号~71号)を発刊

●讃樹會公式ホームページ運営管理

●讃樹會公式Facebookページ運営管理

【事務局】

●医師賠償責任保険取り扱い事業：令和8年4月現在、加入者総数約1150名強。事務手数料の収入がある。

●後援協賛事業

医学部祭、謝恩会への寄附。

卒業時に記念品（ネームペン）贈呈。「Outstading Teacher of the Year」表彰のサポート。

●総会・支部・同期会助成

会の開催にあたり、開催案内発送、備品準備等の事務的協力及び懇親会事業支援金交付

令和6年度：「第1回中部支部会」「第23回関東支部会」「第3回岡山讃樹會」「11期生」「第4回関西支部会」

令和7年度：「10期生卒業30年」「1988入学1994卒業」「第4回岡山讃樹會」「第24回関東支部会」

●ホームカミングディ共催

令和6年度と令和7年度の医学部祭の開催時期に、医学部主催でホームカミングディ開催。讃樹會から卒業生対象に開催案内周知。準備作業及び当日スタッフとして協力。

●地域連携協力事業

令和6年度：子宮頸がん予防イベント

令和7年度：がんイベント

●香川大学支援基金医学部開講50周年記念特定基金へ寄附

寄附実施日：令和6年10月31日

寄附金額：¥10,000,000円

●看護学科同窓会「木蓮会」事務代行

委託契約を結び、同窓会活動業務の事務代行を行っている。讃樹會事務局内のキャビネットの一部を木蓮会物品の保管場所として提供している。契約は毎年自動更新で委託手数料24万円をいただいている。

◆その他の会務報告

①香川大学校友会

香川大学校友会理事に各学部同窓会の会長が就任。理事会に星川会長が理事としてWEB参加。

②総会・理事会・執行部会

総会：R6年5月11日（第18回定期総会）

理事会：R6年度 4/23（対面）、8/6（WEB）、11/26（WEB）

R7年度 5/26（WEB）、8/5（WEB）、12/22（WEB）

執行部会：R6年度 4/23（対面）、8/6（WEB）、11/26（WEB）

R7年度 5/26（WEB）、8/5（WEB）、12/22（WEB）

③事務局

同窓会が実施する事業の運営他、会員のデータ管理、HP管理、公式Facebook管理、会費の徴収と会計管理などの業務全般

令和7年5月に管理棟5階から、新設されたDRI先端医学研究棟1Fに移転

6. 令和7年度決算報告および監査報告

令和7年単年度の決算報告が三木崇範事業局長に代わり星川会長から行われ、引き続き植村信久監査委員長の代理として安田事務局長から監査報告が行われ、承認された。

7. 令和8年度予算案承認の件

三木事業局長に代わり星川会長より令和8年度予算案の説明があり、承認された。

8. 名誉会員推薦の件

平尾智広先生（公衆衛生学元教授）、黒田泰弘先生（救急災害医学元教授）、平野勝也先生（自律機能生理学元教授）上野正樹先生（炎症病理学元教授）、神鳥成弘先生（総合生命科学元教授）、塩田敦子先生（健康科学元教授）が名誉会員に推薦され、承認された。

9. その他

10. 閉会宣言

用意された議事の審議が全て終了し、追加の議案がないことを確認し、議長より閉会が宣言された。

◆教授就任祝賀の報告◆

令和8年5月23日現在、86名が教授に就任され、内72名が現職の教授です。

・R2年4月1日付けで中野広輔（ナカノ コウスケ）先生（平成12年卒15期生）愛媛大学教育学部 学校教育教員養成課程 特別支援教育

・R2年4月1日付 渡部秀樹（ワタナベ ヒデキ）先生（平成13年卒16期生）鈴鹿医療科学大学 看護学部看護学科

・R5年9月1日付 鶴川豊世武（ウガワ トヨム）先生（平成16年大学院修了）東京女子医科大学 臨床工学科

・R6年4月1日付 清岡崇彦（キヨオカ タカヒコ）先生（平成7年卒10期生）国際医療福祉大学医学部循環器内科学

・R7年4月1日付 河北賢哉（カワキタ ケンヤ）先生（平成6年卒9期生）香川大学医学部 救急災害医学

・R7年4月1日付 阿部智一（アベ トモカズ）先生（平成16年卒19期生）昭和医科大学 集中治療医学講座

・R7年4月1日付 堀池 篤（ホリイケ アツシ）先生（平成9年卒12期生）昭和医科大学 内科学講座腫瘍内科学部門

・R7年4月1日付 谷本耕司郎（タニモト コウジロウ）先生（平成11年卒14期生）国際医療福祉大学医学部 循環器内科学

・R8年4月1日付 泉川美晴（イズミカワ ミハル）先生（平成13年卒16期生）香川大学 保健管理センター

・R8年5月1日付 中村信嗣（ナカムラ シンジ）先生（平成16年卒19期生）自治医科大学 新生児集中治療部

会計報告

令和7年度収支計算報告書				令和8年度予算				
令和7年4月1日から令和8年3月31日まで				令和8年4月1日から令和9年3月31日まで				
事業活動収支の部		単位：円		事業活動収支の部		単位：円		
科 目	予算 A)	決算 B)	差額 B) - A)	科 目	8年度予算	7年度予算 A)	7年度決算 B)	差額 B) - A)
1. 事業活動収入				1. 事業活動収入				
①会費・入会金収入	8,000,000	8,050,000	50,000	①会費・入会金収入	8,000,000	8,000,000	8,050,000	50000
②寄付金・広告収入	850,000	780,000	-70,000	②寄付金・広告収入	850,000	850,000	780,000	-70000
③委託手数料収入	3,600,000	3,533,509	-66,491	③委託手数料収入	3,650,000	3,600,000	3,533,509	-66491
④利息	0	24,784	24,784	④利息			24,784	24784
事業活動収入計	12,450,000	12,388,293	-61,707	事業活動収入計	12,500,000	12,450,000	12,388,293	-61707
2. 事業活動支出				2. 事業活動支出				
①事業費支出				①事業費支出				
会報制作費	950,000	1,097,250	-147,250	会報制作費	1,000,000	950,000	1,097,250	-147250
後援協賛事業費	580,000	548,820	31,180	後援協賛事業費	580,000	580,000	548,820	31180
支部・同期会費	200,000	226,360	-26,360	支部・同期会費	200,000	200,000	226,360	-26360
学術助成金事業費	1,650,000	1,589,350	60,650	学術助成金事業費	1,650,000	1,650,000	1,589,350	60650
国外留学助成金事業費	500,000	500,000	0	国外留学助成金事業費	500,000	500,000	500,000	0
学生援助費	800,000	456,000	344,000	学生援助費	400,000	800,000	456,000	344000
国際交流協力費	200,000	42,300	157,700	国際交流協力費	50,000	200,000	42,300	157700
地域連携推進事業費	50,000	50,000	0	地域連携推進事業費	50,000	50,000	50,000	0
研修医協力費	1,000,000	824,356	175,644	研修医協力費	1,000,000	1,000,000	824,356	175644
講演会費	400,000	414,805	-14,805	総会費	350,000			
学会助成金事業費	0	30,000	-30,000	講演会費	400,000	400,000	414,805	-14805
事業費支出小計	6,330,000	5,779,241	550,759	学会助成金事業費	0	0	30,000	-30000
②管理費支出				香川大学医師会助成費	200,000	0	0	0
事務人件費	2,500,000	2,551,660	-51,660	事業費支出小計	6,380,000	6,330,000	5,779,241	550759
事務局・各委員会運営費	1,300,000	1,439,785	-139,785	②管理費支出				
事務局設備投資費	940,000	781,770	158,230	事務人件費	2,700,000	2,500,000	2,551,660	-51660
ホームページ管理費	55,000	55,000	0	事務局・各委員会運営費	1,300,000	1,300,000	1,439,785	-139785
通信費	1,300,000	1,486,372	-186,372	事務局設備投資費	150,000	940,000	781,770	158230
慶弔費	250,000	211,250	38,750	ホームページ管理費	55,000	55,000	55,000	0
雑費	100,000	82,642	17,358	通信費	1,500,000	1,300,000	1,486,372	-186372
予備費	100,000	0	100,000	慶弔費	220,000	250,000	211,250	38750
管理費支出小計	6,545,000	6,608,479	-63,479	雑費	90,000	100,000	82,642	17358
事業活動支出計	12,875,000	12,387,720	487,280	予備費	100,000	100,000	0	100000
当期事業活動収支差額	-425,000	573		管理費支出小計	6,115,000	6,545,000	6,608,479	-63479
前期繰越収支差額	56,230,087	56,230,087		事業活動支出計	12,495,000	12,875,000	12,387,720	487280
次期繰越収支差額	55,805,087	56,230,660		当期事業活動収支差額	5,000	-425,000	573	
				前期繰越収支差額	56,230,660	56,230,087	56,230,087	
				次期繰越収支差額	56,235,660	55,805,087	56,230,660	

監査報告書

令和8年3月10日

香川大学医学部医学科同窓会
監査委員会 星川 広史 殿

公認会計士 岩村 浩二

私は、香川大学医学部医学科同窓会監査委員会の令和7年4月1日から令和8年3月31日に至る令和7年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。

以上

監査報告書

令和8年5月10日

香川大学医学部医学科同窓会
監査委員会 星川 広史 殿

監査委員長 植村 信久

監査委員会監査委員会は、令和7年4月1日から令和8年3月31日に至る令和7年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

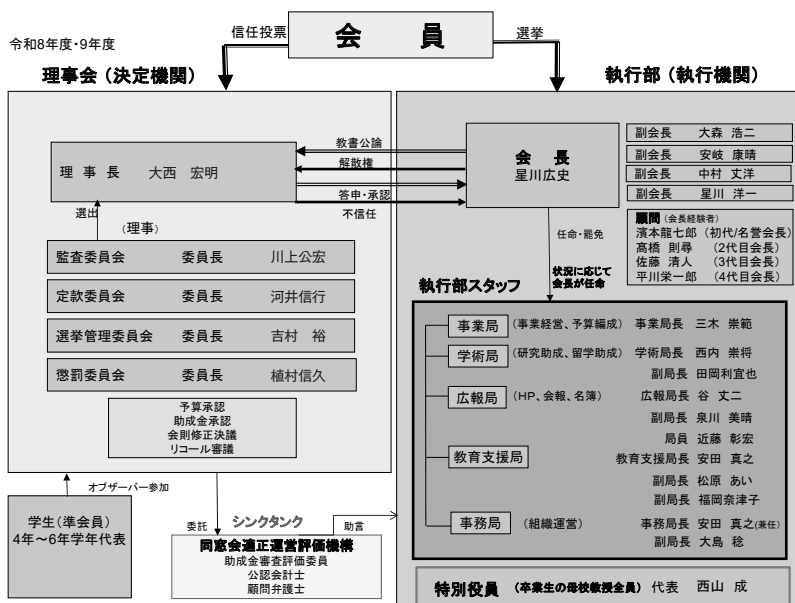
令和8年度・9年度新理事一覧／組織図

理事一覧

	卒年	氏名	所 属
1	S61年	植村 信久	キナシ大林病院 内科
2		大西 宏明	高松赤十字病院 血液内科
3	S62年	河井 信行	かがわ総合リハビリテーション病院
4		川上 公宏	キナシ大林病院 内科
5	S63年	田中 宏和	香川大学 地域医療再生医学講座
6		吉村 裕	吉村整形外科醫院
7	H元年	合田真由美	セントラルクリニック世田谷
8		篠原 豊彦	しのはら医院
9	H2年	羽場 礼次	香川大学 病理診断科・病理部
10		吉田 智子	さくらづか吉田クリニック
11	H3年	高木雄一郎	KKR高松病院 心臓血液病センター 循環器内科
12		市原 典子	高松医療センター 神経内科
13	H4年	佐用 義孝	高松紺屋町クリニック
14		山口 真弘	小豆島中央病院 内科
15	H5年	岩瀬 孝志	香川大学 小児科学
16		川崎浩二郎	広瀬病院 整形外科
17	H6年	浅賀 健彦	香川大学 麻酔学
18		木下 晶	財務省共済組合高松国税局支部診療所
19	H7年	井町 仁美	香川大学 内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学
20		高尾 努	たかお整形外科医院
21	H8年	野間 貴久	香川大学 循環器・腎臓・脳卒中内科学
22		村田 晶子	白神眼科医院
23	H9年	上田 修史	四国こどもとおとなの医療センター 泌尿器科
24		吉田 和矢	吉田内科医院
25	H10年	岡内 正信	香川大学 脳神経外科
26		金地 伸拓	香川大学 呼吸器内科
27	H11年	小林 三善	さんぜんクリニック
28		松原 睦美	讃陽堂松原病院 内科
29	H12年	中井 泰代	高島病院 消化器内科
30	H13年	石井 学	いい内科・胃大腸内視鏡・IBDクリニック
31		藤川 愛	高松市保健所
32	H14年	岡添 誉	香川大学 泌尿器科学
33		小西 行彦	香川大学 教育学部
34	H15年	稲本 隆平	いなもと耳鼻咽喉科
35		加藤 琢磨	香川大学 泌尿器・副腎・腎移植外科
36	H16年	小谷野耕佑	香川大学 総合周産期母子医療センター
37		中村 信嗣	自治医科大学 新生児部門

	卒年	氏名	所 属
38	H17年	杉山 豊	岐阜県立多治見病院 腎臓内科
39	H18年	須藤 広誠	香川大学 消化器外科
40		村上あきつ	香川大学 がんセンター
41	H19年	石川 一朗	香川大学 精神科神経科
42	H20年	田所 智子	香川大学 消化器神経内科学
43		本条 隆行	香川大学 循環器・腎臓・脳卒中内科学
44	H21年	高濱 隆幸	近畿大学 腫瘍内科/ゲノム医療センター
45		福長 健作	香川大学 内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学
46	H22年	天雲 千晶	香川大学 周産期科女性診療科
47		内藤 宏仁	香川大学 泌尿器・副腎・腎移植外科
48	H23年	古市 ゆみ	香川大学 消化器外科
49		西浦 文平	香川大学 医師キャリア支援センター
50	H24年	久保 博之	香川大学 血液内科
51		小林 俊博	香川大学 検査部
52	H25年	内田 俊平	香川大学 輸血部
53	H26年	國正 靖	香川大学 血液浄化療法室
54		山口 智也	香川大学 救命救急センター
55	H27年	和泉 高宏	岡病院 内科
56		宮本 瞬	香川大学 整形外科
57	H28年	秋田 光輝	香川大学 整形外科
58		山田 佳明	香川大学 ヘルスケア AI活用講座
59	H29年	戸田 雄太	香川大学 循環器内科
60	H30年	石田 智也	香川大学 血液内科
61		杉原 幸一	香川大学 膠原病・リウマチ内科
62	H31年	今上 雅史	香川大学 放射線診断科
63		品部 佑太	香川大学 小児科
64	R2年	川田 浩輔	香川大学 呼吸器内科
65		佐伯 浩一	香川大学 腎臓内科
66	R3年	岡野 滉司	香川大学 麻酔・ペインクリニック科
67		飛梅 里佳	四国こどもとおとなの医療センター 小児科
68	R4年	沖田 直斗	坂出市立病院 外科
69	R5年	東 和輝	香川大学 分子腫瘍病理学
70	R6年	尾崎 宏成	坂出市立病院 消化器内科
71		曾根 晴人	香川大学 心臓血管外科
72	R7年	飯 千尋	香川大学 卒後研修センター
73		鈴木 海人	香川大学 卒後研修センター
74	院H8	小川 尊明	おがわ口腔外科クリニック

組織図



特別役員（※母校出身教授）

代表 西山 成	薬理学	H5 年
西山 佳宏	放射線医学講座	H2 年
横井 英人	医療情報学	H8 年
村尾 孝児	内分泌代謝・先端医療・臨床検査医学	H2 年
日下 隆	小児科学	H3 年
三木 崇範	神経機能形態学	H3 年
星川 広史	耳鼻咽喉科学講座	H2 年
三宅 実	歯科口腔外科学	H3年院修了
杉元 幹史	泌尿器科学	S63年
金西 賢治	周産期学婦人科学	H5 年
三宅 啓介	脳神経外科学	H5 年
横平 政直	医学教育学	H11年
岡野 圭一	消化器外科学	H4 年
門田 球一	分子腫瘍病理学	H15年
市来 智子	総合診療学	H9 年
小原 英幹	消化器・神経内科学	H9 年
岩部 美紀	生化学	H16年院修了
河北 賢哉	救命救急医学	H6 年

ニュースの窓

第41期生医学部卒業式・祝賀会・謝恩会

令和8年3月24日



令和8年度香川大学入学式

令和8年4月7日

令和8年度の香川大学入学式は、2026年4月7日（火）にあなぶきアリーナ香川（メインアリーナ）で開催されました。学部生1,328名、大学院生345名、計1,673名が入学し、式典後には新入生歓迎セレモニーが行われました。

上田夏生学長からは、「今日という日に、自分の人生にとって大学に入学したことの意味を考え、チャレンジな目標を立ててください。私たちは、皆さんの学びと成長を精一杯後押しします。」との告辞がありました。

学部新入生の内訳は、教育学部167名、法学部160名、経済学部265名、医学部191名（医学科106名、看護学



科63名、臨床心理学科22名）、創造工学部346名、農学部155名、編入学44名の1,328名です。大学院新入生は、創発科学研究科166名、医学系研究科65名、農学研究科64名、教育学研究科21名、地域マネジメント研究科29名の計345名です。

池田豊人香川県知事からの祝辞の後、学部と大学院それぞれの新入生代表から宣誓が行われ、式典最後には、医学部管弦楽団及び吹奏楽団の合同演奏により、合唱団・香川大学音楽関係者による学歌斉唱で新入生を歓迎しました。

医学部附属病院内に小森秀雲先生の書作品展示

令和8年3月30日

香川大学医学部附属病院では、香川県を代表する書道家 小森秀雲先生（故人）の書作品の寄贈がありました。小森秀雲先生は、2002年に讃樹會の名称が決まった折に、題字の揮毫を快くお引き受けいただけたことから深いご縁があります。作品は附属病院1階に1作品と2階に3作品展示されており、特に2階では壁面に並べられた作品を流れるように鑑賞でき、病院内にあって小森先生の書に接することができる文化的な空間となっています。

展示場所と作品名は以下の通りです。

1階：香川大学医学部附属病院
外来会計カウンター横

◀作品「寒光照鐵衣」

2階：リハビリテーション部付近の廊下東側壁面
作品▶

「金文「目目父」

「白作彝（はくさくい）」

「白と黒」



「寒光照鐵衣」



「金文「目目父」



「白作彝（はくさくい）」



「白と黒」



令和8年度 新研修医をよろしく願いいたします！ 令和8年4月1日

今春、医科18名・歯科3名の新研修医を本院に迎えました。

新研修医達は、不安と緊張感を感じながらも、各病棟・診療科での研修をスタートし毎日励んでおります。

皆様方には研修医育成へのご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(卒後研修センター 臨床研修部門)



集合写真：令和8年度採用新研修医 2026年3月30日オリエンテーション開始式にて撮影

令和7年度卒後研修センターベスト指導医 表彰

令和7年度卒後研修ベスト指導医を受賞して

救命救急センター 石橋 尚弥

このたび、令和7年度卒後研修ベスト指導医という大変光栄な賞をいただきました。研修医の皆さんから評価していただいたことを心より嬉しく思うとともに、日頃から支えてくださる上級医や看護師をはじめ、多職種の皆様に深く感謝申し上げます。

私は弘前大学を卒業後、自治医科大学附属病院で初期研修、同院救命救急センターで後期研修をし研鑽を積み、現在は香川大学医学部附属病院救命救急センターで救急・集中治療に携わっています。学生時代から「臨床・研究・教育をバランスよく実践できる医師になりたい」と考えており、その思いは今も私の原点です。

研修医時代を振り返ると、初期研修1年目の最初の半年が強く印象に残っています。血液内科、神経内科、呼吸器内科のどの診療科を回っていても担当患者さんがICUへ入室していました。研修医当直でも急変症例に遭遇することが多く、同期からは「石橋はよく引くよね」と言われていました。

初期研修1年目の終わり頃から新型コロナウイルス感染症が流行し、その後の研修医生活の多くをコロナ

禍で過ごしました。忘れられない失敗は、通常であればICUで管理されていてもおかしくない重症患者さんをHCUで診療していた際、同期と朝方まで病態や治療方針を議論し続け、寝坊して上級医にご迷惑をおかけしたことです。この経験から、患者さんを思う気持ちと同じくらい、自分自身のコンディションを整えることも安全な医療には欠かせないと学びました。

私が指導で最も大切にしているのは、答えではなく考え方を伝えることです。研修医の皆さんには、「なぜ」と考え続ける姿勢を大切にしてほしいと思います。答えを覚えるより、自分で考え、仲間や上級医と議論した経験が必ず将来の力になります。私自身も診療で学び、研究で深め、教育で次の世代へ伝えるという循環を大切にしながら、これからも学び続ける指導医でありたいと思います。



【新組織発足】2026年4月「卒後研修センター」が誕生

——初期研修から専門医、地域定着までを「シームレス」に支える新たな拠点——

卒後研修センター長 安田 真之
(平成9年卒・12期生)

香川大学医学部附属病院は、「患者さんの権利を尊重し、良質・安全な医療を提供するとともに、医学の教育・研究を推進し、医療の発展に寄与する」という基本理念のもと、地域医療の「最後の砦」としての責務を果たし続けています。この理念を次世代へと引き継ぎ、未来の医療人を育成する体制をさらに強固なものとするため、2026年4月1日付で「卒後臨床研修センター」と「医師キャリア支援センター」を統合し、新たに「卒後研修センター」を設立することとなりました。

統合の背景：地方国立大学病院が直面する厳しい現状

本院における医師養成はこれまで、初期研修を担う「卒後臨床研修センター」と、3年目以降の専門研修（専攻医）を支援する「医師キャリア支援センター」の二本柱で進められてきました。しかし、近年の医師臨床研修マッチングの結果を見ると、地方の国立大学病院を取り巻く環境は極めて厳しい状況にあります。全国的に地方における研修医の確保が困難となっており、地域医療を担う医師の育成への影響が懸念されています。

こうした状況の中で、本院が多くの医学生から「キャリアアップのファーストステップ」として選ばれ続けるためには、社会的ニーズの変化に柔軟に対応し、より魅力的な研修プログラムを提供することが不可欠です。今回の統合は、組織の垣根を取り払い、医学部教育から初期研修、専門医取得、そして地域定着までを一貫して支援する「一気通貫体制」を実現するための決断です。

両センターの歩みと継承される「強み」

新たに誕生する「卒後研修センター」は、両組織がこれまで築き上げてきた実績と強みを融合させます。

旧「卒後臨床研修センター」は、「医師としてのスタートを“まんでがん”サポートする」を合言葉に、研修医を支えてきました。その最大の特徴は、希望する診療科を早期にローテーションできる「オーダーメイド研修プラン」にあります。専門研修へのスムーズな移行を可能にするとともに、多角的な教育機会を通じて優れた臨床医を育成してきました。

一方、2016年（平成28年）に新設された「医師キャリア支援センター」は、新専門医制度に対応したプログラムの統括管理や、JMECC（内科救急医学講習会）などの講習会開催、専門医取得の支援を担ってきました。

両センターが統合されることで、初期研修で培ったスキルや個々の適性を途切れることなく専門研修へと

引き継ぐことが可能になります。研修医一人ひとりの目標に寄り添い、キャリアアップを継続的にバックアップする体制が整います。

全職員で育む「次世代」への思い

令和2年度の制度変更以降、看護師等の多職種による研修医評価が必須となったように、医師の育成は今や病院全体で取り組む重要な課題となっています。若手医師が地域医療の現場で、

1. クリニカル・マインド（臨床的思考）
2. ティーチング・マインド（教育的精神）
3. リサーチ・マインド（探究心）

の三つをバランスよく養うためには、現場で共に働く全職員の理解と協力が不可欠です。

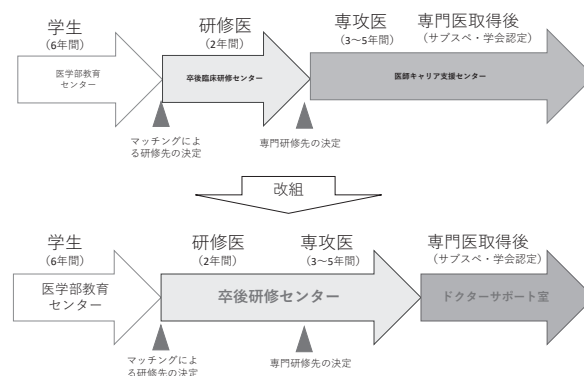
研修医や専攻医が日々懸命に研鑽を積む姿は病院全体に活力を与え、それが患者さんへの「最新・最善の医療提供」へと繋がります。「地域に開かれた大学病院」の実現のためにも、本院の教育活動の成果を積極的に発信し、社会からの信頼をさらに高めてまいります。

結びに代えて

2026年4月、新たな名称とともにスタートを切る「卒後研修センター」は、単なる組織の統合ではありません。それは、若手医師が抱く「夢」を形にし、香川の医療を支える人材を育むための場です。

会員の皆様の母校でもある香川大学医学部附属病院が、次世代の医師たちにとって「最高の学びの場」であり続けられるよう、引き続きのご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

組織体制の変更図



理事会議事録

令和8年度第1回理事会 令和8年4月27日（月）19：30～20：00 WEB開催

WEB参加16名、委任状18名、計34名の参加があり、全理事58名の過半数（29名）以上の参加により理事会が成立した。

1) 令和7年度決算の承認

資料として、収支計算報告書、貸借対照表、財産目録、固定資産台帳、監査報告書が提示され、収支計算報告書に沿って三木崇範事業局長から令和7年度決算の収支が報告された。

参加の全理事により、令和7年度決算が承認された。

2) 令和8年度予算案審議

予算案が三木事業局長から説明された。予算案検討の基資料として、①令和7年度会費納入状況、②地域連携推進事業「がん予防イベント後援依頼」が提示された。

尚、本年10月に香川県医学会を主催する香川大学医師会よりサポートの依頼があり、香川県医学会への寄附20万円が予算として追加された。

令和8年度予算について、参加の全理事により承認された。

加えて、香川大学医師会が行う個別の寄附の呼びかけの際に周知等に協力することも了承された。

3) 研究助成金審査要項（評価方法）の制定

前回理事会からの検討課題である研究助成金審査の評価方法について、西内崇将学術局長から審査要項案が資料として提示された。査読者の選択や選考の仕方そのものはこれまで通りとする。査読評価点に外れ値があった場合について、それが外れ値であることの認定の仕方と、できるだけ外れ値の影響を最小化する再計算の方法が西内学術局長から詳細に説明された。対象となる疑義については、外れ値としてそれを補正してみたものの順位の逆転はないという結果となったことが報告された。

研究助成金／奨励金審査における評価手法及び選考手順の定めとして、審査要項の制定について理事全員の承認があった。

令和8年度第2回理事会 令和8年8月6日（木）19：30～20：00 WEB開催

WEB参加25名、委任状21名、計46名の参加があり、全理事74名の過半数（37名）以上の参加により理事会が成立した。

1. 新執行部役員等について（報告）

星川広史会長（平成2年卒・5期生）から、令和8年度・9年度の執行部役員について、前年度の役員及び執行部スタッフの先生方に引き続き就任頂くことが報告された。

2. 理事長並びに常任委員会委員長の選出について

事前に新年度理事に行ったアンケートで推薦が一番多かった大西宏明先生が今年度も引き続き理事長に就任することが決定した。再任が決まった大西先生から、「今期の理事長をお受けするとともに、長い間理事長を務めてきて、そろそろ交代を考えている。香川大学や香川大学卒業生の益々のご活躍を願い、そのために尽力していくが、もっとパワーアップするためにも、選挙管理委員会の方とも相談して、次期理事長の先生にバトンタッチしたいと考えている。」とお話があった。

常任委員会の各委員長は、監査委員会（川上公宏先生）、選挙管理委員会（吉村 裕先生）、懲罰委員会（植村信久先生）、定款委員会（河井信行先生）にお願いすることとなった。

3. 令和8年度研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

西内崇将学術局長により選考過程についての説明があった。研究助成金4件、研究奨励金2件の申請があり、学外評価委員12名の採点を集計した審査結果が資

料とされた。その結果、評価委員による最高点を獲得した研究助成金部門の久米広夫先生（H20年卒）と研究奨励金部門の下西成人先生（H24年卒）が、執行部案のとおり決定した。

4. 学会助成金審査

2027年開催予定の2件への助成が執行部案のとおり決定した。助成額は要項に則る。

第30回日本脳低温療法・体温管理学会学術集会（2027年7月／高松）助成額4万円。

第71回日本新生児生育医学会・学術集会（2027年11月／高松）助成額10万円。

5. 学生の競争的資金審査

7月の締切までに1件の申請があり、「瀬戸ファーストエイド（SFA）」に2万円の助成が執行部案のとおり決定した。

6. その他

星川会長より、7月28日発生した「令和8年熊本地震」の救援のため、香川大学医学部附属病院からもDMATの2つの部隊が派遣され、現地で活躍された後、本日無事に帰ってきたことの報告があった。

大西理事長から、今年度も香川大学及び卒業生の方々を、讃樹會及び理事会においても、色々な形でバックアップしていきたいとお話があった。

令和8年度 讃樹會研究助成金／研究奨励金 選考結果

速報

部 門	受賞者	研究題目
研究助成金	久米 広大 (平成20年卒) 広島大学原爆放射線医科学研究所 分子疫学研究分野	「多系統萎縮症の 分子病態形成におけるBIN1の機能解明」
研究奨励金	下西 成人 (平成24年卒) 奈良県立医科大学 血栓止血分子病態学	「凝固第Ⅷ因子に抗凝固機能が存在する」

◆選考過程のご報告◆

第22回（令和8年度）讃樹會研究助成者及び研究奨励者について選考を行いました。研究助成金部門は4件、研究奨励金部門2件の全6件の申請があり、学外評価委員12名によって評価を受けました。

評価に当たって、学外評価委員が正当に評価できないと判断した申請書に対しては、採点しなくてもよいこととしております。採点無しというケースを可能な限り少なくするべく、提出された申請内容に鑑み、専門に近い学外評価委員5名を選定し、COIに抵触しないことを委員本人に確認の上、具体的には学外評価委員一人につき、2～3件の採点をお願いしました。

採点は6つの項目（1. 研究課題の学術的重要性・妥当性、2. 研究計画・方法の妥当性、3. 研究課題の独創性・革新性、4. 研究課題の波及性、5. 研究の実現性、6. 研究の学術的優先度）に対して、それぞれ5段階評価（5点：極めて高い、4点：高い、3点：やや高い、2点：やや低い、1点：低い）を行って頂きました。

審査は、獲得点数の査読者平均値である合計点数から、それらを評価項目（6項目）で平均したスコアであるAverageを算出し評価しました。また、評価者間のばらつきによるバイアスをMAD値、MADN値を用いて検証し、中央値、Trimmed mean及び、補正平均値も用いて確認しました。

以上の厳正なる審査の結果、獲得点数は、研究助成金部門では久米広大先生の「多系統萎縮症の分子病態形成におけるBIN1の機能解明」（4.27点／5点満点）が第一位となりました。研究奨励金部門では下西成人先生の「凝固第Ⅷ因子に抗凝固機能が存在する」（3.97点／5点満点）が第一位となりました。

また、今年度の全体平均点は3.68点／5点満点で

した。

学外評価を基に8月6日開催の令和8年度第2回理事会において、久米広大先生に金壱百万円、下西成人先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。

両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

学外評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成 学外評価委員 （敬称略）

臨床科

氏 名	
1 伊藤 進	香川大学 名誉教授
2 今井裕一	愛知医科大学 名誉教授／多治見市民病院 病院長
3 千田彰一	香川大学 名誉教授
4 原 量宏	香川大学名誉教授／医学部医療情報学 客員研究員
5 水野博司	順天堂大学医学部形成外科学講座 教授
6 吉栖正生	広島大学大学院医系科学研究科心臓血管生理医学名誉教授／安田女子大学看護学部 教授

基礎科

1 小林良二	香川大学 名誉教授
2 阪本晴彦	香川大学 名誉教授
3 田畑泰彦	京都大学名誉教授／京都大学大学院医学研究科 形成外科学「細胞バイオテクノロジー」田畑グループ 特任教授
4 徳光 浩	岡山大学学術研究院ヘルスシステム統合科学学域 バイオ・創薬部門 細胞機能設計学 教授
5 西堀正洋	岡山大学学術研究院医歯薬学域 創薬研究推進室 特命・特任教授
6 森田啓之	東海学院大学健康福祉学部管理栄養学科 教授

特集

座談会

これからの香川大学 ～人材確保の方策等～

日時：2026年3月9日（月）16：00～17：00

出席者 西山 成（医学部長）
 星川 広史（副医学部長）
 杉元 幹史（病院長）
 安田 真之（臨床研修センター長）
 〔司会〕谷 丈二（地域医療総合医学講座）

はじめに（企画趣旨）

谷 本日はお集まりいただきありがとうございます。讃樹會同窓会誌の企画として、これからの香川大学における人材確保をテーマに、執行部の先生方、そして若手の教育に携わる先生方にお集まりいただきました。できるだけ多くの若手に香川県に残っていただきたい——その思いを讃樹會の皆さまにお伝えしたく、本企画を立てさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

香川県の医師偏在と「若手の少なさ」という現実

谷 まず、香川県の人口10万対医師数は290.5人と全国平均（267.1人）を上回る一方で、医師の約44%が高松市に集中しています。二次医療圏の小豆地域は医師偏在指標123.9（全国335医療圏中281位）と医師少数区域に分類されており、香川県の課題は「医師の絶対数の不足」よりも「県内偏在」にあるようにも見えます。

率直な現状認識をお聞かせください。

星川 ご指摘のとおり、10万人当たりの医師数で見れば、香川県は長く「医師多数県」と言われてきました。ところが、35歳未満の若手医師の割合は実はきわめ

て低く、全国平均を下回り、下から数えて5番目ほどの少なさです。今後、高齢化で年配の医師が引退していくことを考えると、現状のままでは早晩、香川県も「医師少数県」に陥りかねません。

偏在については、小豆圏・東讃・西讃など全国平均を下回る地域があります。ただ、これはどの県でも県庁所在地に医師が集中し、それ以外は少数になるという構図で、日本全体で見ても東京などの都市部に集中し、それ以外は少ない。同じ構図がどの県でも起きています。日本全体の構図を変えられない限り、県内の偏在だけを解消するのはなかなか難しいと感じています。

谷 若手が少なく、20年後を見据えると年配の医師が多い。20年後にはほとんどの先生が引退され、香川県の人口が約20%減となるのに対し、診療所の先生は6割減になるとも言われます。今後、県内で若い先生を増やしていくことが大きな課題ですね。

星川 そうですね。ただ数を増やすだけでなく、偏在を地域内の医師数だけで考えていては解決しません。遠隔医療など医療DXの仕組みもうまく使っていかなければ、医師数だけを見た議論では難しいでしょう。

谷 病院の統廃合も含め、県全体で意識を高めていく必要がありますし、全国レベルのなかで香川県に来てもらう・残ってもらう人材の調整も、国の関与が必要ということでしょうか。



司会 谷 丈二先生



星川副医学部長

星川 まずは卒後研修の段階で一定数が県内・大学に残る仕組みが要ります。各県・各大学だけで大きく変えるのは難しい、というのが正直なところですよ。

低学年からの地域医療教育とシームレスな育成

谷 香川大学医学部は、低学年から地域医療や多職種連携を含むチーム医療を体験できるカリキュラムを設けています。こうした改革が学生の地域医療志向にどう結びついているか、手応えや、最近の指導・教育体制についてお聞かせください。

星川 入試の面接をすると、「早期から地域医療を体験できる実習に惹かれて受験しました」という学生が少なくありません。そうした取り組みを行っているのは事実です。ただ、本当の意味で十分にできているかは別問題で、人材不足などの課題はあります。

私は地域医療支援センターのセンター長を4年間務めました。香川県にもこの分野へもう少し力を割いていただく必要があると考え、長く県と掛け合ってきました。その結果、寄附講座として谷先生が担当される地域医療総合医学講座のなかに、地域医療を学生に指導する部署をつくっていただきました。さらに総合診療の市来先生に来ていただき、香川に総合診療医センターを設置。入学前から、入学後の学生、卒後研修、その後のリカレント教育までを含めた地域医療・総合診療教育の体制が、ようやく整いつつあります。これからが本番だと思っています。学生のなかには、自分たちで症例検討会を企画する子や、リーダーシップを発揮する子も育ってきており、少しずつ成果が出てきていると感じます。

谷 総合診療を目指す学生も増えた印象があります。最近では自治医大出身の先生方が香川県の地域医療を担っておられますが、その方々との交流などはされていますか。

星川 香川の地域医療を担ってくれる地域枠・自治医大の学生や卒業生と会合する機会 Stars of KAGAWA を設けたり、医学部長とともに自治医科大学を訪れて学生と交流会を開いたりしています。数年前から、少しずつ興味を持ってもらえるよう取り組んでいます。

谷 地道な活動に見えて、ここ最近では自治医大出身の先生が香川大学に入局してくださるケースも続いていますね。来年度以降も入ってきてくださるとのことです。地域医療への風向きが変わり、香川県内に残る方々が

自治医大と手を携えて進んでいるように感じます。

星川 これまでばらばらに支えていただいていたものが、顔の見える関係になってきた気がします。

谷 「顔が見える」、互いを知っているということは大事ですね。

西山 「香川出身の在校生と食事に行っています」とお伝えすると県内の自治医大出身の先生方からも「ありがとう」と言っていただくことが増えました。こういった活動は、こちらこそありがたい話です。本学は新設で、もともと県内の主要病院が他大学からの医師派遣がメインだったため、なかなか香川大学に来てもらえない事情がありました。自治医大に関しては、新しい雰囲気生まれていると強く感じます。

谷 他県では自県の大学に入局して研修が進むのに対し、香川県は独自の道を歩んできた。それが変わりつつある、ということでしょうか。

杉元 それは、県立中央病院や三豊といった県内の主要病院に他大学が入っていたからでしょう。他県でうまく回っているところは、主要病院がすべて自大学の関連病院なので、いずれ大学に入局することになる。最初からシステムが根本的に違うのです。ここを変えていかなければなりませんが、派遣だけでは変わらない。

地域枠・奨学金制度と今後の展望

谷 現在、医学科の地域枠は一般選抜9名・学校推薦5名の計14名、義務年限は9年です。国が進める令和8年度の臨時定員見直しで、香川県は医師多数県に含まれることもあり、枠組みが変わる可能性があります。香川大学としての対応はいかがでしょうか。

西山 学部長として、いままさに大きく変えようとしているところです。

9年間の義務年限があり、香川県から奨学金をいただく地域枠制度ですが、来年度から1名増え、今年までの14名が15名になると文部科学省から伺っています。さらに香川県と協議しているのは、再来年度からもう3名増やし、合計18名のサポートを県からいただくというものです。

加えて、奨学金は出ないものの卒後3年間の県内診療義務を課す制度「次世代枠」の設置が教授会で決定しました。今年度中にアナウンスできれば、2年後から開始できます。つまり、9年間の義務年限がある地域枠18名と、3年間の義務年限がある次世代枠を合わ

せて18+ α 名が、卒後、自動的に香川県に残っていただけの設計です。

さらに、谷先生にもご尽力いただいている在校生向けの奨学金制度が来年度から始まる予定です。年間5名を目安に月10万円をお渡しし、受給期間の1.5倍（2年以上が対象なので最低3年間）は、卒後香川県にいていただく形で制度化します。これにより、さらにプラスアルファの卒業生が香川県・香川大学に残る制度設計を進めてきました。

大きな課題が二つあります。一つは、先ほど谷先生が触れられた「医師多数県」の問題です。人口当たり医師数の多い上位15都道府県が医師多数県とされ、本県は15位。16位の兵庫県とは僅差で、統計上、医師多数県から外れる可能性があります。

もう一つは、2040年を一つの目途に医師確保を考えてこの制度を設計しましたが、それ以降は人口が大きく減り、むしろ医師過剰の時代が来ると言われています。いまは「2040年代を乗り越えるために若い医師を！」、と言っていますが、将来的には規模を縮小していくフェーズも必ず必要になります。香川大学医学部の先生方と動向を見つつ、いつ頃スケールダウンしていくかも、将来の制度設計として考えていきたいと思っています。まずは2040年を乗り切るために、ということを進めています。

谷 今後の展望として、まさにこの「2040年問題」に向けて医師の必要数はピークを迎える一方、人口は減っていく。それ以降の需給をどう均衡させるかが問われますね。

西山 それと、いま予測できない大きな要因がIT化とAIです。技術がどこまで進むか見通せない部分があり、医師がそれほど必要なくなるのであれば、速やかに制度を見直し、方向転換していく必要があると考えています。

県内出身者への期待と医師派遣のあり方

谷 2022年度入試から学校推薦型選抜Ⅱに「県内高校出身枠13名程度」が新設されました。県内出身者が増えることへの期待を、医学部長としてどうお考えでしょうか。あわせて、小豆・大川圏域など医師の少ない地域への派遣を、地域枠の先生に担っていただくべきか、香川大学に残った先生みんなで担うべきか、というジレンマもあります。

西山 これは常にジレンマです。特に小豆郡は「僻地」というイメージが強く、「僻地に行かせるのか」と受け取られがちです。しかし、地域医療に携わることは人間力を養うことでもあり、私は「地域で活躍できる医師を育てたい」と言うようにしています。

全国の同窓会を回っていると、「都会で疲れたので、香川がそんなに困っているなら行ってもいいかな」と言ってくださる卒業生が少なからずおられます。同窓会としてそうした方々をリクルート



西山医学部長

して配置した例はまだないと思いますが、星川先生が同窓会として取り組もうとされていると伺っているので、そうした方々も含めて進められればと思っています。

もう一つ、病院長にも関わる話ですが、先の補正予算の際、文科省から「これまで医局単位だった医師派遣を、病院がある程度コントロールする」ことが求められました。これをどうスキーム化できるか、これから考えていきたいと思っています。

谷 病院単位で人を動かす、ということでしょうか。

杉元 「コントロール部門を作りなさい」という方針は、だいぶ前から言われています。ただ、現実的に可能なのか、という思いはあります。

西山 作らないと予算を出さない、というような……。

杉元 形だけでも整えておかないと、ということですね。それが本当に回り出すと話は変わってくるので、各医局の事情もあり、なかなか難しいでしょうね。しがらみもあります。たとえば「香川大学は白鳥を守る」という形にすると、では、ずっと医師を出してきた徳島大学が「香川大学が見るなら手を引く」となってよいのか。岡山大学はどうなるのか。「香川県は香川大学が見ろ」という話になれば、皆が手を引くことにもなりかねず、相当ややこしい話になります。

星川 香川県は地域医療構想に基づき機能集約を進めていくことが前提になります。これまで香川は岡山・徳島とも連携してきたため、なかなか進みにくかった面がありますが、香川大学としてもできる限り地域医

療構想の実現に寄与していく、という大義名分が要ると思います。

杉元 文科省に行くと、「香川大学がもっと県に要望し、県と一緒にやらないといけない」と言われます。任せてくれるという話ではあるのですが、「もっと県とコラボしなさい」とばかり言われますね。

西山 それを進める上でも、人がいなければどうしようもありません。卒業生がたくさん残ってくだされば、香川県全体を守るスキームも作りやすい。だからこそ、数年間は残っていただきたいと強く思っています。

谷 数年残って医局で経験を積み、その後もずっと残ってくださるのではないかと、という期待もあります。

西山 もちろん、各医局の先生方に残っていただけるよう、雰囲気づくりから取り組まねばなりません。

杉元 小豆島のような地域に医師を派遣できていたのは、医局制度があったからです。「すまないがここに行ってくれ、その代わり……」というコントロールを大学全体で行いなさい、というのが国の考えでしょう。それには全部を任せてもらわないとできません。

谷 小豆島には小豆島のこだわりもあります。たとえば「日本一通いやすい島の病院」のように、小豆島自身も変わっていく必要があるのかもしれません。

星川 その地域に医師が何人いるか、という数え方だけでは難しい。支援の仕方はいろいろあります。同窓会を通じて、IターンやUターンで小豆島に特化して若手を支えてくださる卒業生に来ていただく、といった形も少しずつ進めたいですね。

杉元 若手を残すのもよいですが、定年間際や定年後でも、「香川県のために」と来てくださるリカレントの方がいれば、それでよいと思います。

谷 高知県の地域枠制度では、たとえば大学に在籍しながら僻地へ外勤に行った分を義務年限に算入する、という仕組みもあります。これを香川でも導入し、小

豆島や離島医療に活用できないかと考えています。

杉元 それはいいですね。

谷 県からは「当直に行くことが本当に小豆島で役立っているのか」という声もありますが、当直を

していただくだけでも十分に役立っています。そうした県の誤解を一つひとつ解いていけば、もっとよくなると思います。

西山 その点はぜひ、谷先生から県にお話しいただければと思います。

「選ばれ続ける病院」への取り組み

谷 ここからは病院についてうかがいます。大学病院のマッチング率は全国的に低下し、2025年度は35.2%と過去最低を更新しました。「大学病院離れ」が進むなか、香川大学医学部附属病院が若手に選ばれ続けるために、処遇や指導体制で特に注力されていることは何でしょうか。

杉元 いろいろ考えて取り組んでいます。ただ、「大学離れ」というより「地方離れ・都会志向」の面が大きく、これは私たちの努力だけで解決できる領域ではありません。それでも、「香川県のために、香川大学のために頑張ろう」という人は一定数いますので、その人たちを大事にしていかなければなりません。

皆さんご存じのとおり、アンケートで一番に挙がったのが「給料が安い・処遇が悪い」でした。県内でも他病院が給与を上げて人を呼び込んでいた面があるでしょう。そこで昨年から月10万円引き上げました。これは強いインパクトがあったと思います。

また、アンケートからは、「忙しすぎるのは嫌で、そこそこがよい」という人がいる一方、「もっとガリガリやりたい、当直がしたい、もっと救急を診たい」という人が本学にはとても多いことが分かりました。ところが、本院はその思いに応えられていない。そこでこの4月からは、他科を研修中でも救急研修に参加できる「並行研修」を始めようと考えています。「当直をしたい」という学生が多いのは立派なことで、楽をしたいという人ばかりではない。そうした声の一つずつ応え、姿勢を見せることが大事だと思います。

谷 いきなり全部を変えるのは難しいですね。

杉元 ええ、ぼちぼちです。「変えよう」という姿勢を見せることが大事で、それに応えてくれているように感じます。

谷 気のせいかもしれませんが、最近はあまり不満の声が聞こえません。

安田 そうですね。ここ数年は給与への不満が最も高かったのですが、それが上がって不満は減っています。



残っているのは「当直ができない」こと。これは不満なのか不安なのか。

杉元 両方でしょうね。

安田 「将来的にやらなければ」という意識があり、「守ってもらえる早いうちにやりたい」という思いもある。そうした環境をつくることはとても大事だと思います。

杉元 県内の他病院、たとえば日赤や中央病院を選ぶ理由を聞くと、「当直ができる」「救急でファーストタッチをやらせてくれる」「ある程度自分でやらせてくれる」と、皆が口をそろえます。本院も救急の充実を考えなければなりません。

谷 各診療科が少しずつでも経験させてあげる、という経験が足りていないのかもしれません。誰でもできる手技を、大学のなかでなかなか経験させられていない現状もあるのでは。

安田 その点は、クリニカルクラークシップの段階から少しずつ臨床に参加してもらう狙いがあります。

西山 スキルスラボも補正予算を組んで充実させようとしています。

杉元 雰囲気はよくなっていますよ。

谷 以前より不満の声も聞こえなくなりました。

西山 教育担当の横平先生もそうおっしゃっています。

杉元 優秀な学生が増えましたし、私たちがいろいろな要望に応えようとする姿勢を評価してくれていると思います。

安田 「大学離れ」の話に戻ると、中四国で自大学の学生がきちんと残っているのは愛媛大学と本学です。マッチ数では本学は三番目ですが、自大学の比率は非常に高い。環境や状況をよく見て選んでくれているということです。他大学では、自大学の学生が出ていき、他県から帰ってくる学生が入る、というケースもあり、「大学離れ」の中身が少し違うように感じます。

杉元 岡山・広島はマッチ数が多いですからね。

安田 皆さんが日頃してくださっていることが学生の目に届いていて、残ってくれる。これは本学のとても良いところだと思います。

谷 女性医師のキャリアについては、何か工夫されていますか。

杉元 時短勤務など、先生方が取り組んでくれています。医学部の半分は女性ですからね。泌尿器科でも女性が増えてきています。院内保育の充実も含め、そうした取り組みが見えているのだと思います。

谷 杉元先生のご専門の泌尿器科学会でも、女性が増えているそうですね。

杉元 増えていますよ。かつては「女性はいらない」と断っていた時代もあったようですが、いまは泌尿器科学会全体で女性が1割弱。まだ1割ですが、それでも変わってきました。

谷 さまざまな制度を使って、女性が働きやすい環境を。

杉元 もちろんです。子どもを産んでも働きやすい環境の病院をつくり、そこに派遣するなど、調整しています。

病院運営のコンセプトと好循環

谷 「各診療科の垣根が低く、風通しのよい連携」が香川大学の特徴と言われます。病院長として今後掲げていかれるコンセプトがあれば。

杉元 「支える・つながる・リードする」は以前からありますが、私は三つのコンセプトを掲げ、かだい病院に関わるすべての人を幸せにしたいと考えています。一つは、病院にかかわるすべての人を幸せに。二つ目は「職員ファースト」。三つ目は「Go for it」です。

「Go for it」は、とにかくやってみよう、というコンセプトです。若い人のチャレンジ精神を応援する。やってみてダメなら引けばいい、後始末は引き受けるから——そういう姿勢です。こうした気運が高まれば若い人が元気になり、若い人が元気になれば私たちも元気になる。そうした方向に持っていきたいと思っています。

谷 本当に大事ですね。若い人が元気だと、私たちも何かやらなければ、という気持ちになります。

杉元 そう、相乗効果です。それが好循環で、ほんの小さなことで好循環は生まれます。最近、いい感じだと感じていますよ。

谷 研修医が元気な病院は質も高い。そうした病院になっていくと思いますので、医学部長・病院長の改革が実を結び、さらに良い病院になっていくと期待しています。ありがとうございます。

マッチングの現状と香川大学ならではの強み

谷 続いて安田先生に。全国の大学病院充足率は2024年度で77.0%です。香川大学の直近のマッチング実績

と、そこから見える課題、そして都市部の大病院と比べたときの香川大学ならではの強みを教えてください。

安田 「充足率」と言われますが、大学によっては充足率を上げるためにあえて定員を減らしています。本学は医師部会の皆さんと相談のうえ、充足率より「希望する人が皆来られるように」と、かなり多めに定員を設定しています。そのため数字上は低く見えます。

ただ実際には、ここ5年の平均で22名前後が来ており、その8～9割がそのまま大学に残っています。



安田臨床研修センター長

「大学」という視点と「県」という視点で比べると、その倍ほどが県内に残っています。今年は本学の研修を終えた人数は少なめ16名ですが、3年目に戻ってくる人や他大学から来る人を含めると、39名

が大学で専門研修を始めると聞いています。この数字を増やしつつ、先ほどの「研修医が元気であること」をととても大切にしたい。満足度を高めることで、3年目以降は彼らが中心となり、研修医と一緒に進めてくれるのが理想です。充足率の数字を上げる努力はもちろんしますが、本学は満足度を高めることで、彼らが残り根づいていく礎をつくりたい。その姿を後輩も見ていると思います。

谷 四国の大学のなかでは、香川大学は残っているほうでしょうか。

安田 残っているほうです。愛媛大学が多く、なかには一桁に近いところもあります。愛媛大学は「地域枠は大学で始める」というルールが続いており、その分のベースラインがあります。香川は「県内であれば市中病院で研修してもよい」としているのも、全員が大学に残るわけではなく、半分ほど。ただ、3年目にはきちんと戻ってきてくれています。

杉元 戻ってきたときにポストがあるかどうか、という問題があります。大学病院に10人入ったとして、その人たちが生涯、香川県内で勤め上げられるポストがあるかといえば、なかなか厳しい。

安田 そうですね……。

杉元 ただ来ればいい、というものでもない。まず、その受け皿をつくらなければなりません。

谷 各医局がそれぞれ病院を持っています。香川大学の関連病院を増やし、皆が働きやすい環境をつくる必要がありますね。

杉元 定年まで働ける病院をつくらなければなりません。

谷 香川大学ならではの研修のアピールポイント、強みがあれば。

安田 一番は「オーダーメイド」です。「こういう研修をしたい」「ここで学びたい」という希望に応じて、一人ひとりローテーションのカリキュラムが異なります。もちろん必修などルールに従う部分は相談のうえクリアしますが、外の病院では指導医の数が限られ、一度に受け入れられる人数が決まってしまうため、好きな診療科を自由に選びにくい。大学は指導医が非常に多いため、「ここは3人で行きましょう」「一人抜けましょう」と相談でき、オーダーメイドができる。これは大きな強みで、研修医もプラスに捉えていると思います。

最初に決めたローテーションも、前半をやってみて「これをやりたくなかったから変えたい」という融通がかなり利き、各診療科も受けてくれます。実際にやってみて足りない力を補える。さらに、超音波センターや緩和ケア、感染症の強化など、市中病院では単体で備えにくい部門を集中的に学びたい、という要望にも応えられる。これも大学の強いところです。

シームレスなキャリア支援

谷 病院には医師キャリア支援センターが設置されています。初期研修から専門研修へのシームレスな移行について、どのように取り組まれていますか。

安田 これは病院長の強いリーダーシップのもと進めています。従来、医学教育・卒後臨床研修・専門研修はそれぞれに行われ、どうしてもギャップが生じていました。少なくとも病院側の卒後研修と専門医研修はシームレスにしようとしています。そのまま進めてもうまくいかないのも、医学教育から提案のあった教育医長がしっかりリーダーシップをとり、各診療科の先生方と連携して垣根を下げ、学生から専門医まで一続きにつながっていく体制を整えつつあります。

谷 香川で働き続けてもらうために、大学が医学教育の段階から初期研修・専門研修まで一貫して見守り、一人前の医師に育てる——その姿勢を示していこう、ということですね。

医学生・若手医師へのメッセージ

谷 最後に、いま進路を考えている医学生・若手医師へ、ひとことずつメッセージをお願いします。

杉元 ありきたりですが、私たちは愛情をもって育てているつもりです。都会の病院では労働力としてしか見られない場合もありますが、私たちは愛情をもって誠実に育てます。決して損はさせません。「かだい病院で研修してよかった」と必ず思ってもらえます。今後、香川県の医療の中心は香川大学がコントロールセンターになるのは間違いなく、そのためにも若い人の力が必要です。皆さんの将来には責任を持ちますので、任せておいてください。

西山 私は医学部長として、特に学生に向けてお話しします。私たちは、地域で活躍できる学生の教育に本当に力を入れたと考えています。「地域で活躍」というとどうしても僻地のイメージがありますが、谷先生もおっしゃるように、行政も含めいろいろな人と関わり、交渉しながら物事を進めていく「人間力」を養うことは、人生にとっても非常に重要です。「地域で」というより「香川で活躍できる人材」を育てたい。そのなかから、香川で活躍したのちに世界や日本のトッ

プをとる人も出てくると思います。そうした教育に努めたいと考えています。

安田 私はいつも研修医一人ひとりと個人面談をします。若い人はキャリアを考えると、「これが自分に向いているのか」と不安を抱えがちです。ぜひ不安を持たずにやってほしい。キャリアは入口で一生涯を決めてしまうものではありません。おおまかに10年ずつで考えると安心感があります。まずは10年、6年間学んだアドバンテージのある香川で、自分のなじんだ“ストライクゾーン”で頑張ってもらいたい。10年経てば視点も大きく変わり、伸びていく方向が見えてきます。その後もまだ30年ぐらいの時間がある。ですから、安心して香川に来てくれたらと思います。

谷 私は県外出身ですが、香川大学への愛が強くて残りました。同じ思いとまでは言わなくても、香川県や大学への愛をしっかりと育てていただきたい。「香川のために」と気負わなくても、香川に残ることで、東京や都会では得られないものをたくさん得られると思います。

西山 一緒に幸せになりたいですね。

谷 そうですね。一人で頑張るのではなく、皆で頑張る——それが香川大学の良さだと思います。私は地域枠担当ですが、地域枠だけでなく、すべての学生にこの良さを伝えていきたいと、改めて感じました。



左から星川先生、谷先生、杉元先生、西山先生、安田先生

FOCUS 《柔道部》



初期の柔道部メンバー



試合前の練習風景



第 42 回中国四国医科学生柔道大会



徐々に集まってくれた部員



中四国大会優勝

医学部柔道部は、かつて部員が私一人という状況にあり、存続の危機に直面していました。それでも活動を絶やさないよう練習を続け、部の存続に努めてきました。転機となったのは2025年2月です。新たに3人の部員が入部してくれたことで、正式に活動を再開することができました。それを機に柔道部の存在が徐々に認知され、初心者から経験者まで多くの学生が興味を持ってくれるようになりました。少しずつ仲間が増え、当初は一人だった部員数も、現在では十数人にまで増加しています。

そのような中、部員たちとともに5/16に高知で行われた中国四国大会へ出場することができました。大会では、無段ながら出場した部員が一勝を上げるなど、日々の練習の成果を発揮する姿を見ることができ、大きな喜びを感じました。私自身も個人戦無差別級に出

場し、優勝という結果を残すことができました。しかし、この成果は決して私一人の力によるものではないと考えております。顧問の日下先生のご指導や、共に練習を重ねてきた部員たちの支えがあったからこそ得られた結果であると強く感じています。

今後も柔道部をさらに盛り上げていくために、人とのつながりを大切にしながら、競技面だけでなく組織づくりにも力を注ぎ、柔道に精進していきたいと考えています。

柔道部主将 木田敦也（医学部5年）

支部会・懇親会

香川大学医学部医学科23期生同窓会を開催しました

田所 智子

(平成20年卒・23期生)

2025年11月23日（日）、高松東急REIホテルにて、香川大学医学部医学科23期生同窓会を開催しました。当日は大人41名、子ども2名の計43名が参加し、終始なごやかで温かい雰囲気の中、懐かしく楽しい時間を過ごすことができました。

今回の同窓会は、2008年の卒業以来初めての開催となりました。医師として過ごす毎日は慌ただしく、気がつけば長い年月が流れていました。そんなある日、大好きな宮本先生（旧姓 横見瀬先生）と大学病院内で偶然お会いし、「何か楽しいことがしたい!」と思い立ったことが、今回の同窓会の始まりでした。とはいえ、その時点ではまだ、ただの思いつきで終わってしまうかもしれませんでした。ところが、細川先生に相談してみたところ（たぶんここが私の最大の功績です）、驚くほどスムーズに話が進みました。大学卒業当時にはLINEなどありませんでしたが、わずか数日で当時の同級生85名が集まるLINEグループができあがったのです。

会場の高松東急REIホテルは、医師国家試験のときに泊まったホテルでもあり、酒井先生が提案してくれ

ました。当時はみんな緊張でいっぱいだったせいか、はっきり覚えている人は案外少なかったようですが、そんな場所にまた集まったことも、今回の同窓会ならではのご縁だったように思います。

受付が始まると、会場のあちらこちらで笑顔が広がり、久しぶりの再会を喜ぶ声が聞かれました。しばらくぶりに顔を合わせる同級生も多く、近況報告や思い出話に花が咲き、自然と学生時代の空気が戻ってくるようでした。久しぶりに会ってもすぐに当時の関係に戻れるのは、同級生ならではの改めて感じました。

懇親会が始まると、それぞれのテーブルで会話が弾み、学生時代の出来事や実習の思い出、今の仕事のこと、日々の暮らしのことなど、話題は尽きませんでした。会場のあちこちで笑い声が上がり、写真を撮ったり、懐かしい話で盛り上がり、終始にぎやかで和やかな時間が流れていました。年月がたってもこうして集まれることのありがたさを、改めて強く感じました。

今回の同窓会は、讃樹會理事の細川先生、中野先生のご協力のもと、幹事の宮本先生、酒井先生、石川先



細川先生のスピーチ



岩本先生のスピーチ



酒井先生のスピーチ



宮本先生、筆者、石原先生

生ご夫妻、松永先生（旧姓 前田先生）、菅原先生、そしてその他多くの先生方のお力添えをいただきながら開催することができました。また、岩本先生にはスピーチをいただき、渡邊先生にはBGMをご準備いただきました。皆さまのおかげで、このような温かく楽しい会にすることができたことを、心より感謝しております。

楽しい時間はあっという間で、お開きの時間が近づく頃には、名残を惜しむ声があちらこちらで聞かれました。「また会おう」「次も元気で集まろう」と言葉を

交わしながら再会を約束し、今回の同窓会を終えました。懐かしさと楽しさがつまった、とても思い出深い一日になりました。

今回の同窓会を通して、改めて同級生のつながりの温かさを感じました。今回参加できなかった方々とも、次回はぜひお会いできることを願っています。また皆で元気に集まれる日を楽しみにしています。最後になりましたが、ご参加くださった皆様、そして開催にあたりご協力くださった皆様に心より感謝申し上げます。



集合写真

参加者（五十音順）

石川絵美子、石川昇平（大原）、石原優、岩本隆志、植田安洋、内野秀太郎、尾崎正知
加賀麻祐子（石毛）、河上和代（竹田）、久米広大、久米雄一郎、栗水流健二、古田土雅都紀
酒井亮太、坂本愛（臼井）、坂本成映、佐野友康、柴田祐助、島田裕美（木津）、寫村将志
清水亮、菅原友道、田所明、田所智子（西岡）、田中千晴、近石宣宏、中島崇作、中野裕貴
西田吉宏、福岡奈津子（飯田）、藤井義之、細川洋一郎、前田典克、松永多恵、水本加津子
宮本沙美（横見瀬）、村上博基、山下拓磨、山田有紀、渡邊桂子（横内）、渡邊直樹



第5回讃樹會関西支部会

2026年2月21日／ホテルオークラ神戸

讃樹會 関西支部会（2026.2.21）に参加して

星川 広史（平成2年卒・5期生）

みなさま、健やかに過ごしてはいかがでしょうか。今年還暦を迎え、まさか自分が還暦のお祝いをされる側になるとは・・・と思いながら、でも生きてりゃ歳取るわなあ、と少しずつ受け入れが出来てきた今日この頃です。昨年も関西支部会を開催いただき、多くの卒業生がいろいろな形で活躍されていることを知ることができ、またご子息が母校に入学されるなど、こうやってまた繋がっていくのだなあと感じたこともありました。

今年の関西支部会は、なんとといっても姫路市長を務めておられる清元先生が奥様とお越しくださったことがメインイベントだったのでしょうか。

相変わらず場を一人で盛り上げて、どこまでもしゃべり倒すお姿は昔と変わらない、いや深化している、さすがに政治家やなあと感じました。奥様もその個性に勝るとも劣らない存在感で、人々の目を奪っておられました。

今回一番感心したのが、1～3期生の皆さんしか共有していない当時の出来事を40年ぶりにご披露いただき、そんなことがあったんや、今日来なければ二度と聞くことはなかったかも、ということを知ることができ、これこそが先輩後輩も含めた同窓が集まる意義だなあと感じました。学生時代には話すこともなかった

世代の違う先生方ともお話ができ、気がついていない繋がりがあることを改めてかんじることもできました。

若い人たちにはめんどくさい、と感じることが多いでしょうが、思いがけない出会いや喜びを得る機会になるのも同窓会です。是非参加いただきたいと思

います。関西支部会は今後は4年に1度くらいの頻度で開催、ということになりましたが、毎年開催が待ち遠しい、といった機会になることを心から期待しております。

最後に、関西支部会の開催に多大なご助力をいただいた岡支部長をはじめ、前支部長の磯先生、ご参加くださった関西地区の先生方に心から御礼を申しあげるとともに、支部会がありながら開催に至っていない地域の先生方、ぜひ開催をご検討ください。必ず出席させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。



幹事の山田先生（6期生）



筆者 星川



清元姫路市長（3期生）

西山医学部長（5期生）

参加者

(S62) 磯 篤典、今西 治 (S63) 清元秀泰 (H元) 田中あゆみ (H2) 宮部和徳、大西 勝、星川広史 (H3) 瀬尾 靖、山田 勇 (H4) 岡 勝巳、清元加代 (H5) 西山 成 (H6) 川口雅功 (H7) 福田有子 (H8) 前田敏樹 (H9) 原 周子、田原憲一 (H10) 小田祐資 (H11) 後藤正司、津川二郎 (H15) 高見 充 (H16) 大片祐一 (H25) 松尾晃樹 (H28) 三村昇平

第25回 讃樹會 関東支部会

<日時>

2026年11月14日(土)

受付開始 18時

開宴 18:30 ~ 閉宴 21:00

ドレスコード なし

立食+飲み放題(出入自由)

<会費>

在学生・卒後5年以内は無料！！

お子様も同伴OK！！(無料)

5,000円(卒後10年以内)

12,000円(卒後20年以内)

16,000円(卒後21年以上)

支部会長 岩部 真人 (平成15年卒)

日本医科大学 大学院医学研究科
内分泌代謝・腎臓内科分野 大学院教授

<場所>

ホテルメトロポリタン
エドモンド

東京都千代田区飯田橋3-10-8

土曜夜の都内開催で、
アクセス抜群です！

昨年度は多くの方にご参加頂き
ありがとうございました。

今年も盛大なご参加をお待ち
しております！！

来たらこたえがみつかります！

懐かし話が新たな縁を作る！

実は凄い 香大医ネットワーク！



日々の環境で悩んだりお困りのことはないでしょうか？

同窓生ネットワークを構築し、活路を見出ませんか？

身近な距離に勤務している同窓生と知り合いになれる貴重な機会です

臨床や経営でのノウハウを相談したい

同窓生にバイトに来て欲しい

香大医つながりでバイトが欲しい

母校の思い出を共有できる仲間が欲しい

研修先・就職先を探している

学位の相談がしたい

専門医取得に悩んでいる

転職・転科したい

全国各地どこからでも参加大歓迎です！

などなど

最終締切は

10月31日

参加申込はこちら→

問合わせ先：讃樹會事務局

TEL 087-840-2291

sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp

<https://forms.gle/UjtjUFvEZMifccDx6>



学生の短期留学報告



Chiang Mai University

2026年3月9日～3月29日

6年 一ノ瀬 直人

① 学習状況について

チェンマイ大学の整形外科にて3週間の臨床実習を行いました。実習は毎朝7:30から始まるカンファレンス、病棟回診、手術、外来、遠隔医療（Telemedicine）の見学と多岐にわたりました。特に印象深かったのは夜間当直（Night Shift）です。ERにて整形外科の医師や現地の学生と共に、次々と搬送される外傷患者の初期対応にあたった経験は極めて貴重なものでした。現地の5、6年生が初期研修医しながらに主体性を持って動く姿は、日本の医学教育環境にある私にとって大きな刺激となりました。実習中、医学英語の知識不足やコミュニケーションの壁にもどかしさを感じることもありましたが、現地のレジデントや学生たちが献身的にサポートしてくれたおかげで、最後まで意欲的に学びを継続することができました。

② 生活状況について

実習以外の時間は、現地の医学生と共に大学内のジムでトレーニングに励んだり、現地のラグビーチームの練習や大会に参加したりと、非常にアクティブに活動しました。スポーツという共通言語を通じて、国境を越えた深い友情を築くことができたのは大きな財産です。食事は屋台でのカオマンガイやカオソーイなど、現地の安くて美味しいタイ料理を堪能しました。

一方で、屋外のPM2.5の影響や、設定温度が17度という非常に寒い手術室、シャワー式のトイレなど、日



▲お世話になったチェンマイ大学整形外科のみなさん
(右から2人目が筆者)

本とは異なる生活環境には戸惑うこともありましたが、それらも含めて適応していく楽しさを感じました。休日は早朝からハイキングに出かけ、美しい日の出や600年の歴史を持つ寺院を巡り、チェンマイの豊かな自然と歴史を満喫しました。

③ 後輩へのアドバイス

第一に、英語力の向上に努めてください。専門的な医学知識はもちろんですが、自分の考えや感謝の気持ちを伝えるための日常会話能力が、留学の充実度を大きく左右します。言葉の壁で「言いたいことが言えない」というフラストレーションを抱えないよう、事前の準備を強くお勧めします。また、現地の疾患は外傷が多いため、解剖学を英語で復習しておくことと実習中の理解が深まります。

第二に、何事にも主体的に飛び込んでください。実習だけでなく、現地のコミュニティやスポーツに参加することで、日本では得られない視点や絆を得られます。そして、私たちが普段母国語で医学を学べる環境がいかに恵まれているかを自覚し、常にベストを尽くすという感謝と謙虚な気持ちを持って実習に臨んでほしいと思います。

◀温かく私を迎え入れてくれた
Lanna Rugby Clubのみなさん



④ その他

医療現場だけでなく、文化的な違いに深く触れる機会もありました。偶然にもタイの葬儀に参列する機会がありましたが、日本のような悲しみに包まれた雰囲気とは異なり、現地の文化や死生観の違いを肌で感じる貴重な経験となりました。また、紙カルテの使用や大部屋での診療など、インフラ面で日本との違いはありましたが、限られた環境下でも高い熱量で医療に取り組む現地の医師や学生の姿勢に強く心を打たれました。この3週間で出会った多くの現地の友人たちから受けた刺激と優しさは、私がこれから1人の医師として歩み始める上での確固たる原動力となりました。



▲日中は実習で、放課後はジムで切磋琢磨し合えた最高の友人たち



Newcastle University

2026年4月13日～5月22日

6年 宮下 祐実

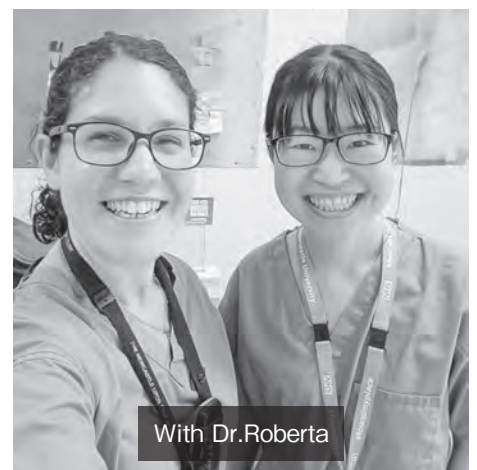
① 学習状況について

ニューカッスル大学のRVIとフリーマン病院にて、感染症科および産婦人科・泌尿器科で6週間の臨床実習を行った。

(i) 感染症科実習

Schmid先生のもとで結核・HIV・一般外来の見学、病棟回診、入院患者の問診、症例発表、放射線カンファレンスに参加した。毎朝、その日の目標や学びたいことを確認されるため、自ら課題意識を持って主体的に学ぶ姿勢を養うことができた。実習中は、レントゲンやCT、心電図、電解質データを提示され、「何が分かるか」を説明する機会が多くあった。当初は“opaque”などの専門用語が分からず苦労したが、その場で質問し、復習を重ねることで理解を深めた。ま

た、上級医から専攻医、専攻医から学生へと指導する「屋根瓦方式」の教育体制や、多職種で患者情報を共有する文化が非常に印象的であった。さらに、電話通訳サービスや電話診療など、多国籍社会に対応した効率的な医療体制についても学んだ。NHSではHIVや結核など多くの医療が無料で提供され、感染拡大防止と医療経済の両立が図られている点も印象深かった。加えて、ランブル



鞭毛虫症、マラリア、狂犬病など日本では稀な感染症を経験でき、RVIが英国初のCOVID-19患者を受け入れた病院として高度な感染症対策を行っていることも学んだ。

(ii) 産婦人科・泌尿器科実習

Roberta先生のもとで手術、緊急外来、初診外来、小児外来、妊婦健診、胎児超音波検査、帝王切開など幅広い診療を経験した。緊急外来では問診や採血、カルテ記載を担当し、患者が安心できるコミュニケーションを心掛けた。また、初診外来では重要な情報を整理し、医師へ簡潔に報告する力を養った。手術では尿道カテーテル挿入や腹腔鏡カメラ操作、第一助手などを経験し、実践的に学ぶ機会が多かった。さらに、胎児超音波画像に「Love ○○ Baby」と記載して家族へ渡す工夫から、妊婦や家族の気持ちを大切にする患者中心の医療に感銘を受けた。これらの経験を通じ、将来は香川県に貢献するとともに、USMLEを取得し国際的に活躍できる医師を目指したい。

② 生活状況について

イギリスでは、フットボールや寮生活を通じて多国籍の人々と交流し、中国人ルームメイトと餃子を作るなど異文化交流を深めた。また、香川大学で知り合ったグラスゴー大学の医学生Arshayと現地で再会できたことも印象的であった。イギリスでは物価が日本の2～3倍と高かったため、外食や生野菜、肉類の購入は極力控え、冷凍野菜やパスタを中心に自炊を行いながら生活費を工夫していた。



③ 後輩へのアドバイス

日本にいるうちから積極的に国際交流へ参加し、基礎医学・臨床医学をしっかり学んでおくことをおすすめする。知識があることで、実習中の理解や議論が深まり役立つと思った。専門用語の英語は実習を通して自然に身につくと感じた。私自身も渡航前は不安だったが、“Let’s give it a try.”の気持ちで挑戦したことで、多くの経験を得ることができた。

④ その他

留学をサポートしていただいた先生方や学務の方々、ニューカッスル大学の先生方や学生などたくさんの方々に支えられて、今までの人生で最も濃く、学びに溢れた6週間を経験することができました。本当にありがとうございました。



▲Royal Victoria Infirmary（実習先病院）

学生支援（競争的資金）活動報告

医学生理学の国際大学生クイズ大会 PQJ2026（医学生理学クイズ日本大会2026）開催報告

4年 荻田 洋平



医学生理学の国際大学生クイズ大会、PQJ2026が、2026年3月21日（土）に香川大学幸町キャンパスにて開催されました。PQJ主催大会として第11回となる今大会は、香川大学PQJ2026委員会（代表 荻田洋平）が主催し、日本・世界4か国・地域から9チーム、30人の大学生が英語で医学・生理学の知識を競いました。激しい競争の結果、シンガポールのNUSが大会初優勝を飾りました。

PQJ2026 結果

順位	大学	チーム名
1位	National University of Singapore	TEAM NUS
2位	国際医療福祉大学	GATE
3位	University of Ljubljana (Slovenia)	SYNAPSE
4位	札幌医科大学	TEAM T.S
5位	香川大学	UDON SYNAPSE

PQJ（医学生理学クイズ日本大会。Physiology Quiz in Japan）は、毎年、日本の大学生が主催して行う大学生クイズ大会です。参加資格は大学生であることのみであり、学部・学年・所在国は問いません。クイズは全て英語で行われるため、世界中の大学生が参加し、生理学を中心とした基礎医学の知識を競い合いながら親睦を深めます。

今回の参加チームは、香川大学、札幌医科大学（2チーム）、国際医療福祉大学、大阪医科大学、近畿大学、National University of Singapore、Yong Loo Lin School of Medicine（シンガポール共和国）、

University of Ljubljana（スロベニア共和国）、Universitas Muhammadiyah Mkassar（インドネシア共和国）の合計9チーム、30名でした。

医学・生理学は非常に重要であると同時に、本来とても面白いものです。しかし、医療職の資格取得のための勉強となると、孤独に、ひたすら砂を噛むような思いで知識を詰め込むことになりがちです。PQJの目的は、参加者に次のような強烈な学習体験をしてもらうことです。①思考の結果が、得点や失点として即座に表れる興奮を味わえる。②仲間と共に学習し、戦う喜びが味わえる。③世界の大学生と競い合うことで、世界基準での自分の実力を把握することができる。④一問ごとに問題解説があり、その場で学習することができる。

世界の医療系大学生が集まる機会は、非常に少ないのが現状です。世界中から医療系大学生が集まり交流し、人脈を築いていけるような場を提供することもPQJの重要な目的です。

PQJのクイズは、早押しクイズやフリップクイズ等で構成され、出題範囲は生理学、解剖学、生化学、薬理学、免疫学、微生物学など基礎医学の広い範囲にわたります。予選、決勝を通じて最終順位が決定され、表彰が行われます。大会中には親睦セッションが開かれ、世界各国の医療系学生が交流を深めることができました。

この度はPQJ2026開催にあたり、讃樹會様より多大なるご協賛と温かいご支援を賜り、誠にありがとうございました。実行委員会をはじめ、香川大学の学生有志一同、心より深く御礼申し上げます。





教室便り

令和8年7月入稿

神経機能形態学

最近の教室の動きについてご紹介します。

スタッフは三木（教授・本学6期生）、鈴木（准教授）、太田（助教）、大給（助教）の4人の教員、大学院生1名に加え、今年度より新たにポストドク研究者として谷島優平が加わりました。また学部学生の秋川（3年）、柴田（2年）、福元（2年）の3名が研究に加わっています。

神経科学領域を遺伝子・分子から行動レベルまで幅広いスパンで研究可能な体制が構築できており、着実に業績を積み上げています。学生は今夏、アジア太平洋神経化学会で発表します。全教員が科研費（基盤C）を有し、鈴木は今年度基盤（B）の採択と2025年度PSI（Peace & Science Innovation Ecosystem）GAPファンド・ステップ2に採択されました。今後の発展が期待できます。

昨年度末に講座事務担当の福富が定年退職しました。26年間勤務頂きました。その際の記念写真です。竹内義喜名誉教授にもご参加頂き、旧メンバーと懐かしい時間を共有することができました。（三木 記）



分子神経生物学

2013年8月に山本が着任し、名称を分子神経生物学としてから13年目を迎えています。現在スタッフ2名が、1名の大学院生とともに、医局の先生方との共同研究を進めながら、教育・研究に取り組んでいます。

当研究室では自閉スペクトラム症・統合失調症などの精神神経疾患や、アルツハイマー病などの神経変性疾患の分子病態の解明と、虚血性神経細胞死の分子機序の解析を主目的に、我々自身が世界に先駆けて見出し、その機能を明らかにしてきた因子群の解析を中心に、研究を進めております。この間では、大学院生1名が学位を取得していきました。

小さな研究室ですが、オリジナリティーに立脚したアイデアを拠り所に、コンパクトにまとめられた実験室を最大

限活用して、基礎・臨床の先生方との共同研究を発展させつつ、教育・研究を進めています。（山本 記）

自律機能生理学

自律機能生理学は、基礎研究成果をベッドサイドへ展開する“トランスレーショナル生理学”を旨に基礎研究に取り組んでいます。准教授1名、助教2名、事務補佐員1名の体制で生理学の研究教育に取り組んでいます。

研究の主要なテーマは、炎症性腸疾患や肺高血圧の病態生理及び腸内細菌叢の探索、ミオシン軽鎖ホスファターゼのリン酸化による活性低下の仕組みとその構造基盤の解明、加齢に伴うインスリン抵抗性発症におけるトロンビン受容体PAR1の役割解明です。

教育では、生理学Ⅱ（医学科2年次）、生理・薬理実習（医学科3年次）と研究室配属が主担当科目です。

研究室配属の最終日に開催する成果発表会では、実験方法の原理や得られた結果の論理的解釈についてじっくりと諮問することで、厳密な科学的思考法・素養の育成を実践しています。科学的素養とは、事実（結果）と意見（考察）を明確に区別し、事実から論理的に意見を形成する能力と取られています。この思考法の鍛錬は、卒業生がいずれの道を歩んだとしても医療プロフェッショナルの基盤として生涯役立つと期待しています。（倉原 記）



生化学

生化学教室は、教授の岩部 美紀、佐々木 すみれ助教の教員2名を中心に、精力的に実験に取り組む学部学生、そして、事務職員1名と共に抜群のチームワークで生化学の教育・実験を進めています。

教育活動では、医学科2年次「生化学」の講義・実習をはじめ、早期医学実習、内分泌代謝ユニット、症候論、医科学研究、医学実習、臨床心理学や看護学科の講義など、学部・大学院教育を幅広く担当しています。

研究活動では、「Translational biochemistry」の実践を目指し、糖尿病や肥満関連疾患など代謝性疾患の病態解明と医療への応用に挑戦しています。膜受容体や脂質代謝酵素をターゲットにした創薬研究に加え、食事・栄養に関するブ

プロジェクト、AIやウェアラブルデバイスを活用した運動バイオマーカーの開発など、健康長寿の実現に向けた多角的な取り組みを行っています。ムーンショット型研究開発事業、科研費の国際先導研究、基盤研究Bをはじめとする競争的資金によって推進し、国内外の共同研究も展開しています。

私達は、ワクワクするScienceを追究しており、バックグラウンドや経験を問わず、広く仲間を募っています。讃樹會の諸先生には今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。（岩部 記）

ゲノム医科学・遺伝医学

当教室は開講して3年目になり、現在のスタッフは、教員3名（隈元、小川、早田）、協力研究員1名と事務補佐員1名です。学生教育は、2年次生の分子遺伝学、医療倫理学・臨床遺伝学、3年次生の内分泌学・ゲノム医学を担当しています。研究は、主に固形癌の発がんや転移に関連する遺伝子の探索、ノックアウトマウスを用いた機能解析を行っています。また、消化器外科と連携して臨床検体を用いたがんの早期診断や予後予測の分子マーカーの開発にも取り組んでいます。臨床面では、附属病院で臨床遺伝ゲノム診療科を標榜しており、認定遺伝カウンセラーとともに様々な診療科における遺伝性疾患の遺伝カウンセリングを通して診断やサーベイランスを行っています。大学内で唯一の次世代シーケンサーを用いて、昨年3月より香大ブランドとなる「香大がんリスク遺伝子パネル35」という遺伝学的検査を開始しました。生まれながら遺伝子異常があると乳癌や大腸癌などのがん発症リスクが高い35遺伝子をまとめて調べる検査です。県の衛生検査所の認可を取得しており、全国の複数の医療機関からも検査依頼を受けています。

ゲノム医科学・遺伝医学の領域では最先端の取り組みを続けて香川大学の発展に貢献して参ります。（隈元 記）

分子腫瘍病理学

分子腫瘍病理学教室では学内外の多くの研究室と共同研究プロジェクトを実施しており、老化、テロメア構造異常、染色体異常、核膜整合性異常を伴う様々な癌（膵臓、胃、大腸、肝臓、肺、乳腺、腎臓、脳、骨軟部）の研究や、オートファジーによる細胞死制御に関する研究を進めています。病理学研究のDX化に伴い、スライドスキャナーNano ZoomerやAI機能搭載解析ソフトHALO AIを活用し、人工知能による病理解析の効率化と数値化を目指した研究を展開中です。

教室としては、腫瘍細胞の進展に伴う形態変化や分子機構を解明し、癌の予防や診療の発展に寄与することを目指しています。病理学的研究に熱意を持った大学院生や研究生を国内外から募集していますので、ご興味を持たれた方は当教室へご連絡ください。（門田 記）

免疫学

免疫学講座は、教員3名、技能補佐員1名、事務補佐員1名で教育と研究を進めております。令和8年4月から本

講座に織が准教授として加わり、教員の欠員状態は解消されました。大学院生は在籍しておりませんが、マイペースで研究に取り組んでおります。教育面では、医動物学の講義を本講座で担当することとなりました。昨年度は、医学科3年生2名（課題研究）、および2年生1名（早期医学実習Ⅱ）が本講座を選択し、様々な経験を積みました。学生諸氏の将来の研究に繋がれば良いと思っております。研究の特色としては、希少糖による免疫抑制メカニズムの解明と応用研究などが挙げられます。今年度は主たる実験室の改修工事があり、研究活動のペースダウンが予想されます。一方、新しい教員が加わりましたので、これまでにないユニークな研究成果を積み上げていく所存です。今後ともよろしくお願いいたします。（星野 記）

分子微生物学

分子微生物学教室は教員3名、事務補佐員1名、技能補佐員2名、パート研究員1名で微生物学の教育研究を行っています。大学院生は現在2名で研究に取り組んでいます。教育面では3年生の微生物学の講義および実習、4年生の統合講義「感染症ユニット」を担当しています。臨床心理学科2年生の「微生物学・医動物学概説」の講義も担当しています。今年度は看護学科の微生物学の講義を臨時で担当する機会をいただき、医学部3学科全ての学生との接点ができたことを大変嬉しく思っています。将来、医療従事者として必要となる微生物の基礎知識や臨床的な重要項目を着実に習得できるよう教材の改良などに努めています。研究面では腸内および口腔の細菌叢（フローラ）の生理機能に影響を及ぼす環境因子の探索と疾病予防への応用に関する研究を行っています。次世代シーケンスによる口腔や腸内フローラの解析が容易になったことで、ヒトの常在フローラと疾病との関連についての研究が活発に行われています。当教室でも新しい解析技術を取り入れ、腸内フローラ研究をさらに推進し、社会に還元できるような研究成果を発信していきたいと考えています。（桑原 記）

公衆衛生学

公衆衛生学教室は、2025年9月に春里が着任し、教員3名、事務補佐員1名の体制で、大学院生1名、研究生1名、学部生3名とともに教育・研究・社会貢献に取り組んでいます。教育では、主に医学科の公衆衛生学講義、社会医学実習、大学院教育を担当し、学外実習やディスカッションを通じて、学生が地域の健康課題を現場から考えられるよう努めています。研究面では、生活習慣病、エクスポソーム、メンタルヘルスを柱とし、香川県小児生活習慣病予防健診データの分析や、マイクロ・ナノプラスチックの健康影響など、予防医学に関する研究を進めています。また、香川県と連携した「公衆衛生トークセミナー」や「メンタルヘルス研究プロジェクト」などを通じて、地域の公衆衛生人材育成にも力を入れています。2027年2月には「災害・健康危機に備える四国の公衆衛生」をテーマに、四国公衆衛生学会を開催予定です。今後も、地域に根ざし、実社会に貢献できる公衆衛生学教室を目指してまいります。（春里 記）

医学教育学

讃樹會の皆様にはいつもお世話になります。

今回の医学教育学講座の「教室だより」では、医学教育において今最も改革が必要な「臨床実習」について現状と課題をお伝えしたいと思います。一昔前の臨床実習はご存知の通り「ポリクリ」と呼ばれ、教員の外来や手術を後ろで見学するスタイルが主流でした。しかしこのスタイルでは学生の知識は増えても、医師として必要な実技を確実に「修得した」というレベルには至りませんでした。現在の医学教育では臨床実習はポリクリとは呼ばず、「クリクラ（クリニカルクラークシップの略）」と呼称するようになり、ポリクリと異なる点は、学生が卒業までに各種医行為を確実に修得することに力点が置かれていることです。すなわちクリクラにおいては教員が「何を教えたか」ではなく、学生が「何ができるようになったか」が重要とされています。クリクラでは学生は「医療チームの一員」として参加し、基礎的な医行為から実践し、その度教員から評価とフィードバックを受け、「確実に修得した」というレベルに達して卒業に至るのが理想とされています。学生が行う医行為の中には実際の患者さんでは実践しにくい内容もあり、その場合はスキルスラボに備えられたシミュレーター等を使用して訓練しています。しかし、全ての学生に適切な評価やフィードバックのもと医行為を実践・修得してもらうには本学教員の有する時間やマンパワーの点において限界があり、更なるクリクラ改革が必要と考えています。古いポリクリの慣習から抜け出し、新しいクリクラのシステムを構築するために横平教授はじめ医学教育学・教育センターのスタッフも日々頑張っております。讃樹會の皆様のお力添えを賜れば幸いに存じます。何卒宜しくお願い申し上げます。（坂東 記）

血液・免疫・呼吸器内科学

讃樹會の皆様におかれましては、猛暑・酷暑の折、何かとご苦労も多いことと拝察申し上げます。

厳しい暑さが続いておりますので、どうぞくれぐれもご自愛くださいますようお願い申し上げます。

血液・免疫・呼吸器内科学教室の近況をご報告申し上げます。

門脇則光教授が講座を主宰され11年目となり、4年間に渡る香川大学医学部附属病院長の激務を終えられました。救急体制充実など沢山の改革を成し遂げられましたが、私ども内科学の教室員としては、医療クラークの増員や医師のタスクシフト、超音波センターの設立による検査枠の拡大など多くの方策により、負担の軽減や医療レベルの向上に繋がり大変感謝しております。門脇教授を中心に若手医師のリクルートに積極的に取り組み、讃樹會会員の皆様や教室の関連施設からの手厚いご支援も頂戴し、教室員が37名増加致しました。香川県の医療体制における経験年数が浅い医師もおりますので、ご迷惑をおかけすることもあるかと存じますが、是非とも温かくご指導頂けますようお願い申し上げます。

診療については、県内外の讃樹會会員の皆様のご支援により、3診療科で4,896名（血液内科934名、膠原病・リウマチ内科2,823名、呼吸器内科1,139名）（内紹介患者614名（血

液内科120名、膠原病・リウマチ内科261名、呼吸器内科233名））、入院患者966名（血液内科325名、膠原病・リウマチ内科246名、呼吸器内科395名）を診療させて頂いております。一昨年から血液内科で導入しております難治性血液悪性腫瘍に対するCAR-T細胞（患者さんの血液から採取したTリンパ球に、血液がん細胞を攻撃できるように「キメラ抗原受容体（CAR）」と呼ばれる特殊なタンパク質を遺伝子導入したTリンパ球）療法の順調に進んでおり、本治療を膠原病に応用するための治験が進行中です。血液内科に加えて、膠原病・リウマチ内科、呼吸器内科スタッフも県内外の患者さんや医療機関の先生方に、さらなるお役に立てるよう尽力しております。今後も県内外の讃樹會会員の皆様のご期待に添えるよう、教室員全員で頑張っております。

以上近況報告をさせて頂きました。讃樹會のみなさまより一層のご支援を賜りますよう教室員一同心よりお願い申し上げます。（土橋 記）

消化器・神経内科学

讃樹會の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

私たちは小原英幹教授の就任から3年目を迎え教室員一丸となって診療・研究・教育に取り組んでおります。

消化器内科では、消化管グループが全国ハイボリュームセンターと同等のESD実績を有し、肝臓グループは肝疾患診療連携拠点病院として肝臓に対する高度な集学的治療を、胆膵グループはERCP・EUS関連手技において県内最多の実績を誇っております。また、高齢者大腸内視鏡・脂肪肝・膵嚢胞精査など専門入院プログラムも推進しています。

脳神経内科では、県内神経疾患診療の中核を担い、神経変性疾患・神経免疫疾患を中心に神経内科専門医が高度な専門医療を提供しております。

いずれのグループも国内外の積極的な学会発表・論文発表に加え、国内留学、ハンズオンセミナーの定期開催など若手教育も積極的に行っております。

今後とも讃樹會の皆様の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。（田所 記）

精神神経医学

中村教授が当講座の教授に就任されて21年目を迎えました。就任以来、香心会の設立や香川県との連携による地域医療精神医学講座の開設など、県内の精神科医療の充実に取り組んでまいりました。精神科への入局者も増え、精神保健指定医、精神科専門医の育成も着実に進んでおります。

現在、当科では認知症、児童思春期、摂食障害、睡眠障害、緩和ケア、リエゾン精神医学など幅広い領域で診療を行っております。アルツハイマー型認知症治療薬レカネマブ（レケンビ®）の導入後は、神経内科、放射線科、地域の先生方と連携しながら診療体制を整えております。今後も香川県の地域医療を支える講座として、医局員一同、診療・教育・研究に努めてまいります。同窓会の先生方には、引き続きご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。（佐々木 記）

周産期学婦人科学

香川大学医学部母子科学講座では、「すべての女性の笑顔を守る」を心がけ、香川県の産婦人科診療を牽引してきました。周産期医療では日本で二番目に総合周産期母子医療センターに認可され、香川県全域から母体搬送・新生児搬送を受け入れ、全国的に見ても周産期死亡率の低い県となっています。また、婦人科診療では婦人科良性疾病・悪性疾病に対する腹腔鏡手術およびロボット手術数を毎年増やしています。今年度は新たにリンパ節郭清に対するセンチネルリンパ節ナビゲーション手術も導入予定であり、常に最新の医療を提示できる体制を維持し、地域医療における中核病院としての使命を果たしています。日本では、毎年出生数が減少していることが社会問題となっています。医師偏在や医療格差も大きな課題である地方の周産期医療を支え、すべての女性が安心して出産ができる環境を守りつつ、すべての世代の女性の健康維持にも貢献していくことを使命と考えています。（金西 記）

呼吸器・乳腺内分泌外科学

当教室は、「心と身体に優しい外科医療の実践」を理念に掲げ、患者さんに寄り添う低侵襲で質の高い外科医療を追求しています。現在、呼吸器外科医局員5名全員がロボット手術の術者として診療にあたり、うち3名がブロッカー資格を取得しています。ロボット支援下肺区域切除件数は2年連続で全国1位を達成し、進行癌に対しても術前免疫療法+化学療法後の手術を積極的に行うなど、根治を諦めない治療を実践しています。乳腺外科においても、多職種連携のもと、診断から薬物療法、手術、乳房再建、遺伝性乳癌診療まで、患者さん一人ひとりに応じた個別化医療を実践しています。研究面ではICG併用赤外光胸腔鏡と腫瘍免疫を柱に、臨床と研究の両輪で発展を目指しています。若い世代に外科の魅力を伝えながら、教室のさらなる飛躍に努めてまいります。（松浦 記）

形成外科学

2017年より教授職を務めた永竿智久先生が2026年6月に退職され、昨年4月に着任した坂本道治准教授が診療科長を引き継いでおります。今年度は石谷一真先生が新入局者として加わり、スタッフ3名・医員7名の計10名体制で診療を行っています。三柳先生は、さまざまな手術手技を習得すべく京都大学形成外科に国内留学中です。

当教室では、重症熱傷の診療を県内唯一の施設として救命救急センターと連携して担当しており、手術から急性期処置まで一貫して対応しています。また、糖尿病・CLTIに伴う下肢難治性潰瘍、口唇口蓋裂などの先天性疾病、神経線維腫症、先天性巨大色素性母斑、あざのレーザー治療にも積極的に取り組んでいます。耳鼻咽喉科・乳腺外科など多くの診療科との合同手術における再建も担当しており、地域の先生方からのご紹介を歓迎いたします。

乾燥同種培養表皮の開発を中心とした皮膚再生研究を行っており、企業との共同研究も進めています。さらなる医局の発展を目指し、臨床・教育・研究に邁進して参ります。（坂本 記）

脳神経外科学

当教室では、脳神経救急、脳血管障害、脳腫瘍、小児神経外科、機能的脳神経外科を中心に「安全性」と「確実性」を第一に、高難度手術や新規治療にも積極的に取り組んでおります。また、救急科との密接な連携のもと、重症脳神経疾患（頭部外傷含）に対して迅速かつ包括的な診療体制を構築していることも本学の大きな特色です。さらに近年は、畠山哲宗医師を中心として脳脊髄液漏出症診療も発展してきております。昨年には、多々納幹貴先生が日本神経内視鏡学会技術認定医を取得し、教室の診療力向上につながる大きな成果となりました。また、来年には日本脳神経モニタリング学会を主催する予定であり、大変光栄に感じております。

研究面では現在6名の大学院生が在籍し、日常診療と両立しながら主体的に研究活動を進めています。今年は川井伸彦先生によるPET関連研究が国際誌に受理されるなど、学術成果も着実に実を結んでおります。今後も新たなエビデンスを世界へ発信し、地域医療と脳神経外科学の発展に貢献できるよう、教室員一同、一層努力してまいります。今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。（鈴木 記）

耳鼻咽喉科学

当科は伝統的に少人数で耳科、鼻科、咽頭、頭頸部腫瘍、音声嚥下などの多領域をカバーしてきました。今後もその傾向は大きく変わらないものと思いますが、人口動態、疾患の変化、医療人材不足、DX化など、今後医療を取り巻く環境は激変することが予想されます。

その中で人数に頼らず、しかし過不足なく香川県の耳鼻咽喉科医療を支えるための備えをどうするか、を特に考えるようになりました。個々の能力を高めるとともに、大学、病院、クリニックの医師がそれぞれの能力を活かしながら垣根なく連携して働く、真の意味での働き方改革を実現していきたいと思っています。理想的な地域医療構想を実現するため、まずは耳鼻咽喉科という診療科の中でそのモデルを確立し、医療はソーシャルビジネスであり、その中でどうすれば医療従事者が満足度を維持できるか、を追求していきたいと思っています。（星川 記）

麻酔学

麻酔科学講座は、25年度3名、26年度1名の新入局員を迎え、麻酔、集中治療、ペインクリニックの各分野に医局員22名で日々励んでおります。機構専門医試験も麻酔科学会2名、ペインクリニック学会1名が無事合格しました。

麻酔分野では、麻酔科管理10列運用を堅持し、年間手術件数も順調に増加、昨年は7476件（麻酔科管理4123、緊急手術1088）を達成しました。

集中治療分野においては、術後及び院内急変患者を対象として昨年度604人を加療しました。標準化死亡率は、低い水準を維持しており、質の良い医療を提供できていると自負しております。また、リハビリを積極的に実施しており、ADLの早期回復、病棟看護業務の負担軽減にも寄与してい

ます。

ペインクリニック分野では、新たに偏頭痛外来を開設しました。線維筋痛症や顔面痛などの疾患にもこれまでと変わらず注力しております。

これからも各科の皆様と連携し、病院の発展に尽力してまいります。（岡部 記）

歯科口腔外科学

歯科口腔外科学教室は、三宅実教授が教室責任者として12年目を迎えました。関連病院として、独立行政法人国立病院機構四国こどもとおとなの医療センターに岩崎昭憲、かがわ総合リハビリテーション病院に伏見麻央、愛媛県口腔保健センターに南佑子、和歌山県紀南病院に高尾健二郎、滝宮総合病院に花井伶が外向しております。現在、当教室には15名の大学院生が在籍し、学位取得に向けて基礎研究および臨床研究に取り組んでおります。また、3名の研修医を迎え、日々の診療にも力を入れております。

学会活動としては、2025年12月に日本小児口腔外科学会総会・学術大会を主催いたしました。さらに、2026年10月には日本口腔科学会中国・四国地方部会、2027年11月には第57回日本口腔インプラント学会総会・学術大会の主催を予定しております。特にインプラント学会総会は、大阪国際会議場にて約4,000名の参加が見込まれる大規模な学術集会となる予定です。また、三宅教授が日本障害者歯科学会専門医、中井史が日本口腔外科学会指導医および日本口腔インプラント学会専修医、中井康博ががん治療認定医（歯科口腔外科）、花井伶が日本口腔外科学会認定医を取得いたしました。

診療面では、手術室における静脈鎮静下局所麻酔を積極的に活用し、小外科手術において多数の症例に対応しております。また、顎変形症手術を多数施行するとともに、外部の矯正歯科医と連携した合同カンファレンスを定期的に開催し、集学的治療体制の充実を図っております。

今後も香川県内の歯科口腔外科診療における基幹病院として、チーム医療の充実やサーチャイムドをもった医療人の育成に邁進してまいります。（中井 記）

臨床腫瘍学

講座開設から10年を越え、当講座は黎明期を経て、新たな発展期を迎えました。地域に根ざした診療を基盤に、治験や臨床試験を含む先進的ながん医療を推進するとともに、臓器別治療にがんゲノム医療を融合した個別化医療の診療・教育・研究に取り組んでいます。情報技術の進歩により、患者さん自身が多くの医療情報を得られる時代となりましたが、病気とともにどのように生きたいかという思いは一人ひとり異なります。経験豊富な医師から若手医師まで、その声に真摯に耳を傾け、「その方にとって最適ながん医療」を患者さんとともに考え、診療科や職種の垣根を越えたチーム医療を実践しています。

また、教授・辻晃仁が2年後に開催される第66回日本癌治療学会学術集会の大会長を拝命し、医局一丸となって準備を進めています。地域に育てられた大学として、香川県のがん医療の発展と次世代の腫瘍専門医育成に引き続き尽

力してまいります。今後とも当講座へのご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。（村上 記）

放射線腫瘍学

2012年1月の活動開始以来「高精度放射線治療の基礎的・臨床的研究の推進およびがん治療の将来を担う専門医の育成」を目標に掲げています。現在、放射線治療専門医として柴田教授、高橋学内講師、穴田助教、西出医員が常勤しています。臨床面では、2025年1月より新たな小線源治療機器を導入し、子宮癌に対する腔内照射の精度向上および組織内照射を併用する場合の高い安全性を確保することが可能となりました。また強度変調放射線治療（IMRT）・画像誘導放射線治療（IGRT）も積極的に実施しており、2025年はIMRT件数が143例と過去最多でした。IMRTを実施している疾患は従来の頭頸部腫瘍、脳腫瘍、前立腺癌、子宮癌に留まらず、最近では進行肺癌や直腸癌などにも拡大しており、さらなる症例数の増加が見込まれています。

研究面では科研費にも採択されており、国内外の学会や英文論文での成果をコンスタントに発表しています。

関係各科の皆様には臨床や共同研究でお世話になっておりますが、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。（穴田 記）

薬剤学

薬剤学教室では2026年3月に前任の小坂信二先生がご退官され、同年5月より私が着任いたしました。当教室は薬物動態の理解を基盤とし、最良の薬物療法の実現を目指して研究・教育を進めております。

個々の患者に最適な薬物治療を提供するためには、薬物動態の深い理解と、それに基づく適切な投与量調節が不可欠です。当教室では、薬物血中濃度測定手法の研究開発、薬物動態解析による薬物間相互作用の検出、母集団薬物動態パラメータの構築と臨床応用、TDM解析支援ソフトウェアの開発と臨床応用、医薬品の有効性・安全性の定量的評価、調剤過誤防止システムの研究開発、医薬品の投与方法（簡易懸濁法等）の最適化など、多岐にわたるテーマに取り組んでおります。大学院生の研究指導に加え、医学部附属病院薬剤部門との連携のもと、臨床現場に根ざした研究を推進しています。また、医療者が適正な薬物療法を実践できるよう、学部生・大学院生への教育にも力を注いでまいります。

讃樹會会員の皆様には、今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。（見野 記）

健康科学

健康科学教室では、本年度より三明淳一郎教授と小児科医の加藤の二名体制で、看護学科の教育・研究を行っています。学部教育では、人体に関する基礎知識を学生に深めてもらうことを目的に「形態・生理学」「生化学」「栄養学」等を担当し、将来リーダーとなって力を発揮できる看護師の育成を目指しています。大学院では、博士前期課程・後

期課程を通じて研究の基礎となる部分の教育を担い、研究指導を行っています。研究面では、三明がサルコペニア・フレイルなど加齢関連疾患の発症・進展の機序を解析する研究を進め、TriNetX等を用いたリアルワールドデータ解析による研究指導を進めています。また、加藤は母乳育児と乳幼児発達、早産児の脳機能発達を研究しており、「発達から老化まで、人の健康を科学する」を教室の掲げるテーマとしています。現在、博士前期課程に4名が在籍しております。大学院進学を目指すスタッフがいらっしゃいましたら、お気軽にご連絡ください。

(加藤 記)



病理診断科・病理部

香川大学医学部医学科の同窓会のみなさま、こんにちは。香川大学医学部附属病院病理診断科・病理部です。私たちは病理医7名、臨床検査技師8名、事務3名で毎日働いています。患者さんの体から採取された胃生検や手術検体などの組織診、手術時の術中迅速診断、子宮頸部や尿などの細胞診、不幸にして亡くなられた患者さんの剖検など、仕事は多岐にわたります。また、初期臨床研修医や基礎配属、ポリクリ、スーパーポリクリの学生を受け入れており、卒前・卒後教育にも力を入れています。病理診断は最終診断です。治療方針の決定に大きく関与しており、正確で迅速な診断が求められます。プレッシャーを感じることもありますが、臨床的に鑑別診断に挙げられていない疾患を診断できたときはとてもやりがいを感じます。一見、何をしているか分かりにくいと思いますが、自由に出入りできますのでぜひ一度遊びに来てください。病理診断科・病理部一同、お待ちしております。

(香川 記)

現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。ご連絡は、讃樹會HP、メール、FAXいずれでも結構です。



香川大学医学部医学科同窓会讃樹會行き

(TEL・FAX 087-840-2291)

スマホはこちら

会員情報変更届

記入日 年 月 日

卒業年	S・H・R・院 年	希望送付先	勤務先・現住所・実家
該当するものに○をお付けください	開業医 / 産業医 / 勤務医 / 研修医 / 在校生 その他 ()		
ふりがな			
氏名 (旧姓・旧名)	()		
現住所 公開 可 ☐ 不可 ☐	〒		
	TEL	FAX	
	E-mail		
勤務先 公開 可 ☐ 不可 ☐	名称	部署	
		役職	
	〒		
	TEL	FAX	
	E-mail		
恒久的住所 (実家) 公開 可 ☐ 不可 ☐	(氏名・続柄) 〒		
	TEL	FAX	
連絡事項及びメッセージ 			

※公開の可・不可にチェック ☒ を入れて下さい。

(事務局記入) 処理日 年 月 日

編 集 後 記

残暑厳しい折、皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。夏の疲れが出やすい時期ではございますが、先生方には日々の診療・研究・教育活動に精力的にお取り組みのことと存じます。

さて、去る7月28日に発生した令和8年熊本地震により、多くの尊い命が失われ、また多数の方々が被災されました。亡くなられた方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。一日も早い復旧・復興を願ってやみません。

本号では、多くの先生方より新任・退任のご挨拶をいただきました。長年にわたり香川大学医学部および附属病院のご発展にご尽力いただいた先生方のご功績に深く敬意を表しますとともに、新たにご就任された先生方の益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。新旧先生方のお言葉は、同窓生にとって大きな励みとなることと存じます。

特集では「これからの香川大学一人材確保の方策等」と題した座談会の模様をお届けいたします。地域医療を支える医師・研究者の確保は、香川大学医学部にとって喫緊の課題であります。座談会では、現状の課題や地域枠制度、奨学金制度の活用など多岐にわたる話題が活発に交わされました。同窓生の皆様にとっても、母校の将来を考えるうえで有益な内容となっておりますので、ぜひご一読いただければ幸いです。

また、全国各地の支部におきましても讃樹會が開催され、各地で活躍される同窓生の皆様が一堂に会し、親睦を深めるとともに情報交換の場となりました。遠く離れていても、香川大学医学部という共通の絆で結ばれた同窓生の温かいつなかりを、各支部のご報告からお感じいただけることと思います。

毎号のことながら、ご多忙中にもかかわらず寄稿してくださいました皆様、讃樹會会員の皆様、事務局の皆様に心より感謝申し上げます。引き続き、同窓生の皆様に親しんでいただける誌面づくりに努めてまいります。些細なことでも結構ですので、ご意見・ご提案がございましたらお寄せいただけますと幸いです。

広報局長 谷 丈二（平成14年卒・17期生）

事務局からの
お知らせ

〒761-0793 香川県木田郡三木町池戸1750-1 TEL 087-840-2291
E-mail sanjukai-dousou-m@kagawa-u.ac.jp HP <https://dousoukai.site/sanjukai/>
讃樹會公式Facebook <https://www.facebook.com/sanjukai>

◇医学部祭開催日程

令和8年10月9日（金）～10月11日（日）

◇医師賠償責任保険を年間通じて受け付けています。
詳細は事務局にお問合せ下さい。資料をお送りします。

◇助成金公募のお知らせ：

詳細は、讃樹會HPの「要項・ダウンロード」を参照下さい。

◆国外留学助成金公募

2026年度第2回国外留学助成金 2026年9月末日締切

2027年度第1回国外留学助成金 2027年3月末日締切

◆学会助成金公募 開催前年6月末日までに申請下さい。

◆準会員（医学科在校生）対象の助成金

「学生の国際交流助成」公募（留学から帰国後1ヶ月以内に申請）

「競争的資金」公募（自主的な活動への支援）（申請締切はHPを確認して下さい。）

◇変更連絡：現住所、勤務先、役職、メールアドレスの変更、改姓などがありましたら必ずご連絡下さい。
ご連絡方法は、讃樹會HPから入力、メール、変更届用紙をFAX、郵送いずれでも結構です。

訃 報

名誉会員 神保利春先生 （2026年3月）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。